

令和4年度

史跡古津八幡山 弥生の丘展示館

企画展関連講演会

記録集



2023

新潟市文化財センター

# 目次

## 目次

### 第1章 企画展関連講演会の記録

#### 企画展2関連講演会（第1回）

ここまでわかった！古津八幡山遺跡―最新の調査成果を交えて―（相田 泰臣）・・・・・・・・・・ 1

#### 企画展2関連講演会（第2回）

新津の山に大きな遺跡と古墳があった！―歴史を変えた古津八幡山遺跡―（坂井 秀弥）・・・・・・・・・・ 27

### 第2章 企画展の概要と企画展関連講演会アンケート結果

（1）令和4年度「史跡古津八幡山 弥生の丘展示館」企画展の概要・・・・・・・・・・ 57

（2）企画展関連講演会アンケート結果・・・・・・・・・・ 58

本書は、新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター（以下、市文化財センター）が、令和4年度に催した「史跡古津八幡山 弥生の丘展示館」企画展関連講演会の記録集である。

スライドは講演会当日に使用されたものを基本的に収録したが、都合により編集したものがある。

第2章には各企画展の概要と、関連講演会のアンケート結果を収録した。

本書は電子書籍版に限られ、紙での出版は行っていない。

本書の編集は相田泰臣・平山千尋・八藤後智人（市文化財センター、令和5年3月時点）が行った。

※表紙写真：方形周溝墓（S2743）調査風景（令和4年度確認調査・北東から撮影）



講演風景（第1回）



講演風景（第1回）



講演風景（第2回）



講演風景（第2回）



企画展1 展示風景-1



企画展1 展示風景-2



企画展1 展示風景-3



企画展1 展示解説風景-1



企画展1 展示解説風景-2



企画展2 展示風景-1



企画展2 展示風景-2



企画展2 展示風景-3



企画展2 展示解説風景-1



企画展2 展示解説風景-2

# 第1章 企画展関連講演会の記録

■令和4年度 企画展2 関連講演会（第1回）

## ここまでわかった！古津八幡山遺跡 －最新の調査成果を交えて－

相田泰臣（新潟市文化財センター学芸員）

### 目次

1. はじめに
2. 古津八幡山遺跡の概要
3. 最近の調査成果を交えて見た古津八幡山遺跡

### 1. はじめに

本日のお話ですが「ここまでわかった！古津八幡山遺跡」ということで、最近の調査成果を交えて、お話をさせていただきたいと思います。

（スライド1）話の流れですけれど、1番目に「はじめに」、2番目に「古津八幡山遺跡の概要」ということでお話をさせていただいたあと、3つ目に今日の本題であります「最近の調査成果を交えて見た古津八幡山遺跡」ということで、お話を進めさせていただこうと思っております。

（スライド2・3）まず「はじめに」ですが、1987年に磐越自動車道の土取り計画地にこの古津八幡山遺跡のある丘陵が選ばれ、その事前調査を行ったところ遺跡が発見されたということになります。今から35年前ですね。そして35年の中で、これまでに今年の調査を含めて25回の発掘調査を実施しております。平成17年に史跡に指定され、そのあと整備を行い、現在は歴史の広場として皆さんからご利用いただいているわけですが、実はまだ遺跡全体の3分の1くらいについて調査が終わったという段

階で、残りの3分の2については、まだよくわからないといった状況です。そのため、平成29年度から調査が不十分な場所について、再び発掘調査を行っているということでもあります。その結果、これまでに古津八幡山遺跡で最大となる大型の竪穴建物が発見されたり、昨年の調査では古津八幡山遺跡で最大の方形周溝墓、お墓が発見されるなどの成果がありました。そのお墓ですが、あとでまた詳しくお話をさせていただきますが、合計4つの埋葬施設を持つお墓であるということが、去年と今年の調査でわかりました。そういった大きな発見が平成29年度からの史跡の指定地外側の調査で見つかっているということになります。

（スライド4）まず古津八幡山遺跡が保存された経緯ですが、1987年に最初の調査が行われ、その後もどんどん重要な成果が上がっていました。これは1988年の現地説明会の様子ですけれど、324名と非常に多くの方が参加されたということです。重要な弥生時代の遺跡、あるいは大きな古墳があるということで、土取り場として選ばれたのですが、何とか遺跡を保存できないかということで、地元の新津青年会議所さんが主体となって保存運動が起こったと聞いております。日本考古学協会も保存に向けた動きを行っております。そして国や県、それと新津市の間でいろいろと協議を行った結果、1990年に遺跡の主要部分が保存さ

れることに決まりました。

(スライド5) さらに、新潟市の広域合併後の平成17年、2005年7月14日に、古津八幡山遺跡として国の史跡に指定されたという流れになります。平成17年に国史跡の指定を受けますが、古墳部分については少し遅れて2011年に追加の指定を受けています。

(スライド6) ちなみに、国指定の文化財は3種類に分けられておりまして、1つ目が貝塚や古墳、城跡などの遺跡ですね。2つ目が庭園や山岳などの名勝地。3つ目が動物や植物、地質鉱物などで、1つ目ですと史跡、2つ目ですと名勝、3つ目ですと天然記念物に区分されます。古津八幡山遺跡はこの1番目の史跡ということになります。国の史跡として登録されています。

(スライド7) 現在、新潟市内では国史跡が4つあります。古津八幡山遺跡のほかには、西蒲区の角田山麓にある前方後円墳の菖蒲塚古墳、それと今は新潟市の歴史博物館、みなとびあの敷地内にある旧新潟税関、そして平成30年に国の史跡になった新津油田金津鉱場跡の4つです。また県の史跡ですと、西区の的場遺跡と緒立遺跡の2つがあります。

(スライド8) 話は古津八幡山遺跡に戻りますが、平成17年に国史跡になったあと史跡の整備を行っています。これは遺跡の空撮写真ですが、これまでに丘陵の上に竪穴住居7棟や土塁、環濠や条溝と呼んでいる深い濠、溝、それと古墳時代の古津八幡山古墳などを復元整備しています。最初、弥生時代の竪穴住居や環濠などを復元整備し、ガイダンス施設である弥生の丘展示館が開館した平成24年に暫定供用を開始し、その後、古墳の復元整備が終了した平成27年から全面供用を行っています。

(スライド9) 赤い破線で囲っている所が国の史跡の指定範囲です。約12ヘクター

ルと、非常に大きな面積が指定になっておりますけれど、平成29年からはその北東部の指定地外の場所の調査を行っています。遺跡の中心は標高約50mの丘陵上ですが、そこから1段下がりをまして、標高約25mの丘陵中腹域の尾根において、そこまで遺構が広がっているのかどうかということを確認するために発掘調査を行ったわけです。平成29年から令和4年まで調査を行っており、平成29年から令和2年の調査では、古津八幡山遺跡で最大となる大型の竪穴建物が見つっています。また、令和3・4年の調査では、古津八幡山遺跡で最大となる方形周溝墓と呼ばれる弥生時代のお墓が見つかるなど、大変多くの成果が上がっています。

(スライド10) これは平成30年の新潟日報の記事ですけれど、最大級の大型竪穴住居が見つかったということで記事になりました。

(スライド11) また、令和3年の年末には県内最大級の方形周溝墓で、3人分の複数埋葬施設が見つかったということで新潟日報に取り上げられました。ちなみに今年、令和4年の調査で、実はもう1つ埋葬施設が見つかりまして、合計4人分の埋葬施設があったということがわかりました。東日本では、この時期1つのお墓に対して1人の埋設施設を持つのが一般的でして、古津八幡山遺跡は県内で初めて2人以上の複数埋葬が見つかった事例ということになりました。

## 1. 古津八幡山遺跡の概要

(スライド12) 次に、古津八幡山遺跡の概要ということで、これまでの調査や整備などについて概観していこうと思います。

(スライド13) 古津八幡山遺跡では縄文時代後期の集落も見つっていますが、主



体となるのはこの弥生時代です。弥生時代の後半の時期、弥生時代後期、それと終末期という時期に丘陵の上に集落がつくられています。紀元後から西暦 250 年くらいの間、弥生時代の集落がつくられています。そのあと丘陵の上から集落はなくなります。その後、古墳時代中期という時期、西暦 400 年くらいの時期になると、県内最大の古墳、古津八幡山古墳がつくられるといった流れになります。

そのあと、奈良時代、平安時代になると、この丘陵の周辺で鉄づくりも非常に盛んに行われており、蒲原郡の製鉄基地があったと考えられています。ちなみに、現在「金津」という地名がありますが、その金津という地名については古代の鉄づくりに由来すると考えられています。

(スライド 14) またあとで細かい説明を行います。古津八幡山遺跡は弥生時代の後期、それと終末期という時期、この青く塗ってある部分に集落がつくられているということになります。左側の数字は西暦です。紀元直後から弥生時代後期となっていますが、古津八幡山遺跡については西暦 50 年前後くらいからはじまり、丘陵の上に環濠が掘られたり、竪穴住居やお墓がつくられていたりしています。そして、弥生時代の終わりの時期、人によっては古墳時代の初めなどとも言ったりしますが、大体西暦 250 年くらいに集落は丘陵の上からいなくなるということがわかっています。

ちなみに、赤字で示している遺構が、平成 29 年からの調査で見つかった遺構になります。令和 2 年まで調査を行った大型竪穴建物など、丘陵中腹域の調査で見つかった遺構を赤字で示しています。大型竪穴建物 SI 1 は、古津八幡山遺跡の終わりくらいの時期の建物ですが、今年の調査では古津八幡山遺跡が出現した頃の竪穴住居も見つかっています。

また、令和 3 年の調査で見つかった大型の方形周溝墓については SZ743 と名称を付けていますが、令和 4 年の調査では、その大型方形周溝墓の近くでもう 1 つ方形周溝墓が新たに見つかりました。SZ822 と名称を付けています。最近の調査成果については、またあとで写真などととも詳しくお話しさせていただきます。

### 1) 弥生時代の概要

(スライド 15) 最初に弥生時代の高地性環濠集落ということを見ていきたいと思いません。

(スライド 16) 古津八幡山遺跡の位置ですが、阿賀野川と信濃川とが最も近接する場所に位置する遺跡です。あとで出土遺物などの特徴もお話させていただきますが、古津八幡山遺跡では北陸と会津方面の土器がかなりの割合で出ているので、日本海から阿賀野川を経由して内陸のほうに入っていく、もちろん逆のケースもありますが、日本海と内陸とをつなぐ交通の要衝に位置する遺跡であると考えられています。

(スライド 17) これは寺沢薫さんがつくられた高地性集落の分布図です。弥生時代中期後半から後期初めは瀬戸内海沿岸ですとか九州のほうで高地性集落が出現しているわけですが、弥生時代の後期後半から終わりくらいになるとその分布範囲に変化が認められ、北陸、新潟、越後平野のほうにも高地性集落が見られるようになります。その高地性集落の日本海側の北限域に古津八幡山遺跡は位置します。平成 17 年の史跡指定時には、日本海側最北の高地性環濠集落として指定を受けましたが、そのあと、日本海沿岸東北自動車道に伴う発掘調査で村上市の山元遺跡が見つかり、現在はそこが日本海側最北の高地性環濠集落になっています。また、村上市には滝ノ前遺跡という遺跡があり、そこは環濠を持たない高地性集落です。山元遺跡は、環濠を持つ高地

性環濠集落です。高い所にあり、濠を持つ集落の日本海側で一番北の遺跡は、現在山元遺跡ということになります。

ただし、山元遺跡は環濠をもつのですが浅く、幅もそれほど広くないので飛び越えられるような規模の濠です。お墓については、古津八幡山遺跡では方形周溝墓ですが、山元遺跡では土坑墓、穴を掘ってその中に亡くなった方を埋葬する土坑墓というお墓しか山元遺跡では見つかっていないというような違いがあります。山元遺跡は高地性環濠集落ではありますが、西日本や北陸の高地性環濠集落、古津八幡山遺跡などと比べ、やや形式的で、内容もやや異なると言えるかと思います。

(スライド 18) 古津八幡山遺跡についてはこれまで 25 回の発掘調査をしています。青く塗ってあるのが環濠と呼ばれる濠です。丘陵の頂部では幅 2 m、深さ 2 m の濠が途切れながらも存在し、その環濠に囲まれた内部を中心に、緑色で示してある堅穴住居が確認されています。これまでの調査で合計 66 棟の堅穴住居が見つかっています。

東側の濠の外側では方形周溝墓と呼ばれる四角くて周りに溝を持つお墓が 3 つ見つかっています。また、丘陵の一番高いところでは、前方後方形周溝墓と呼ばれるお墓も見つかっています。

この丸く塗られているところは時代が少し新しくなり、古墳時代の古津八幡山古墳になります。古墳の下や周辺からも弥生時代の堅穴住居が多く見つかっており、外環濠 A や D の際近くまで弥生時代の堅穴住居がつくられていたということがわかっています。

(スライド 19) これは条溝の写真です。環濠や条溝という名称が付いていますが、条溝についても環濠についても機能は同じで、どちらも幅が 2 m くらいで深さも 2 m くらいの断面 V 字形の濠です。環濠につい

ては、地形に沿った形で集落の周りを巡る濠を環濠と呼んでおり、条溝については尾根を直交方向に切る濠について条溝ということで、一応名称を付けていますが、形状や機能はどちらも同じということになります。

(スライド 20) これは環濠の写真です。作業員さんが中に入っていますが、この黒いところが環濠になります。環濠の一部だけを掘っているところです。幅が 2 m くらいで、深さも 2 m くらい、断面が V 字形の濠です。このように、中に入ると自力ではなかなか脱出できないような濠が集落の周りにあったということが発掘調査で確認されています。

(スライド 21) 環濠の断面をアップにした写真です。ポールと作業員さんが写っているのでその大きさが分かるかと思います。高い丘陵の上であり、環濠と呼ばれる濠を周りに巡らすということで、古津八幡山遺跡は防御的な集落であると考えられています。このような集落を高地性集落、あるいは高地性環濠集落と呼んでいるということになります。

先ほど高地性環濠集落の分布図が出てきましたけれど、弥生時代の後期という時期を前後して、遅いところでは弥生時代の終わりくらいまで続く集落が各地で出現します。防御性の高い集落といえ、文献に倭国で争いごとがあり、戦いをへて女王卑弥呼を共立し、争いごとが収まったといった記述があることから、この争いごとの影響を反映した集落だろうというのが有力な説かと思っています。

(スライド 22) 現在はこのような形で濠の部分、あるいは濠の外側の土塁などを復元整備しています。

(スライド 23) 次に堅穴住居ですが、これまでに 66 棟見つかっています。古津八幡山遺跡の堅穴住居の基本的な構造ですが、

四角形で四隅が丸くなる平面形で、4本の柱で上屋を支えています。壁際には壁溝と呼ばれる排水や湿度調整のための溝が巡っており、一辺の壁際には貯蔵用の穴、貯蔵穴を1つ備えます。また、竪穴住居の中央付近では煮炊きを行った炉の跡が確認され、写真のように土が赤く焼けた状態で検出されます。これらが、古津八幡山遺跡で一般的な竪穴住居の構造になります。

(スライド 24) 現在、調査成果に基づいて7棟の竪穴住居を復元整備しています。

(スライド 25) これは方形周溝墓の写真です。方形周溝墓は丘陵の頂上付近で3つ見つかっています。

(スライド 26) 写真中央の穴は棺の痕跡で、その中から鉄剣や石鏃などが副葬品として出土しています。この鉄剣ですけれど、柄の部分にシカの角の痕跡が付着していることから鹿角装という、シカの角を加工した柄が付いていたということがわかっています。この鉄剣については、朝鮮半島製の可能性が高いと考えられています。なお、このようにシカの角を柄として使うのは、東日本の関東や中部地方の遺跡で多いという分布状況です。

(スライド 27) 今はこのように復元整備をしています。手前側の小さい方形周溝墓から、先ほど見た鉄剣や石鏃などが出ています。すぐ隣にも長方形の方形周溝墓がありますが、こちらについては削平により埋葬施設が残っていなかったというような状況です。

(スライド 28) 遺跡で一番標高の高いところでは、前方後方形の周溝墓が見つかっています。この前方後方形周溝墓が、古津八幡山遺跡における弥生時代のお墓としては一番新しいと考えられています。それまで四角い形のお墓であったのが、四角にさらに通路状の長方形の部分がついた前方後方形という新しい形式のお墓が出現しま

す。弥生時代の終わりくらいの時期であろうと推測されていますが、古墳時代の前方後方墳という、同じような形の古墳につながるようなお墓が、県内ではいち早く古津八幡山遺跡でつくられているという状況がうかがえます。

(スライド 29) 現在はこのように復元しています。

(スライド 30) 古津八幡山遺跡出土の土器を見ると、左側に分布範囲がありますが、まず北陸系の土器、今の石川県や富山県などと同じような北陸系の土器が出土しています。それから東北系の土器、福島県などと非常によく似た土器が出ています。比率は北陸系が40%で東北系が35%と同じような割合で出ています。さらにその北陸系の土器と東北系の土器を合わせたような土器、形は東北系ですが、文様、調整の仕方などは北陸の要素があるといった折衷の土器、ここでは地元系土器としておりますが、そういった土器が20%の割合で出土しています。そのように、3系統の土器が同じような割合で出土しているというのは、古津八幡山遺跡の非常に大きな特徴であると言えます。阿賀野川を介して日本海と内陸、会津方面とを結ぶ交通の要衝に位置する古津八幡山遺跡の環境や当時の地域間関係をよく示しているかと思えます。

また、割合は少ないですが長野系の土器も古津八幡山遺跡に入ってきています。信濃川や山間部のルートを通して入ってきた状況が推測されます。

## 2) 古墳時代の概要

(スライド 31) 次に古津八幡山古墳について少し説明します。

(スライド 32) 古墳時代になると丘陵の一番北の端に古津八幡山古墳がつくられます。

(スライド 33) これまでの発掘調査で直径60mの大型の円墳であることがわかっ

ています。古墳の調査を行った経緯ですが、丘陵一帯は第二次世界大戦前後の時期に畑として利用されていて、その畑の土地を確保するために古墳の斜面部分を段切りするということが行われていました。そのため、古墳の形や規模が確定できない状況でした。史跡指定されたあと古墳を復元整備しようということで、古墳の形や大きさを確定させるため、平成 23 年から 25 年の 3 年をかけて発掘調査を行いました。

(スライド 34) その発掘調査成果を基に復元整備しました。これが整備後の写真です。斜面があつて、途中平らな部分があつて、また斜面があつて墳頂の平らな部分があるということで、2 段になっている古墳です。丘陵の端につくられているため、古墳の上からは越後平野を一望でき、佐渡島も確認することができます。

(スライド 35) これは新潟や東北の古墳の分布図です。古津八幡山古墳はこの場所になります。南は九州から北は東北まで古墳が分布していますが、日本海側の古津八幡山古墳よりも北の古墳となると、古津八幡山古墳から北東約 40 km、胎内市に城の山古墳があります。これも円墳ですね。それと、庄内平野に鷲畑山 2 号墳という、1 辺が 20m ほどの四角い古墳ではないかと言われているものがある程度でして、日本海側における古墳の分布域としては新潟平野が北限域となっています。先ほど、弥生時代の高地性環濠集落について村上市の山元遺跡が北限ということでお話いたしました。古墳時代の古墳の分布についても似たような状況で、新潟平野が北限域となっています。

ちなみに、新潟市の国史跡である菖蒲塚古墳は前方後円形の古墳で、古墳時代で一番有力なお墓の形である前方後円墳の分布の日本海側における北限に位置づけられます。このように、新潟平野は弥生時代の高

地性集落や古墳文化の北限域になっている状況がうかがえるかと思います。

(スライド 36) 写真は古津八幡山遺跡を空撮した写真です。古墳は尾根の一番北側につくられていて、平野を見下ろせる場所に位置しています。ちなみに、平野にあるこの建物を建てる際、古津八幡山古墳と同じくらいの時期の集落が見つかっています。舟戸遺跡という遺跡で、古津八幡山古墳の被葬者の生前の集落である可能性も指摘されています。

(スライド 37) これは周辺の遺跡分布を示したもので、古津八幡山古墳はこの場所です。北側に古墳時代の遺跡が点々とあります。舟戸遺跡はここです。ここから古津八幡山古墳と同じくらいの時期の遺物が出ています。森田遺跡からは古墳時代前期の壺の口の部分が出土しています。最近調査をしている場所はこの辺りです。弥生時代の終わりくらいに時期の大型堅穴建物などが見つかった尾根になりますが、その後、古墳時代になると例えば森田遺跡辺りに下りていった可能性があるのかなというふうに考えています。

(スライド 38) 舟戸遺跡は社屋の建設に伴い狭い面積ですが発掘調査が行われています。この色が塗られている部分が堅穴住居です。そして、この長方形の部分が掘立柱建物です。それと杭列、柵が見つかっていて、一般集落ではないだろうと考えられています。

(スライド 39) これが杭列の写真です。等間隔で木の杭が見つかっています。

(スライド 40) これは堅穴住居の写真です。一辺 7.5m と古墳時代の大型の堅穴住居が見つかっています。黒い部分は炭です。県内においてカマドを使う堅穴住居としては一番古い可能性がある建物です。

### 3) 奈良・平安時代の概要

(スライド 41) 奈良・平安時代になると

大規模な製鉄、鉄づくりが行われます。

(スライド 42) 左上は新潟県埋蔵文化財センター近くの大入遺跡の写真です。竪型炉と踏みファイゴの遺構が見つっています。右側にイラストがありますが、踏みファイゴは人が両側に乗ってシーソーのように踏みこむことで竪型炉の中に空気を送り込むものです。このように、砂鉄から鉄をつくるための遺構がいくつも見つっています。

この製鉄関連の遺構については現地でも復元などの整備をしておりますが、地元の金津の地名の由来と言われており、関係者からは製鉄についても学習できるような整備を今後してほしい、といった声も頂いており、今後の検討課題となっております。

以上、古津八幡山遺跡の概要についてお話をさせていただきました。このあと、本題であります「最近の調査成果を交えて見た古津八幡山遺跡」ということで、お話をさせていただきます。

## 2. 最近の調査成果を交えて見た古津八幡山遺跡

(スライド 43) ここからは近年の調査成果をお話しながら、弥生時代の古津八幡山遺跡について見ていきたいと思います。

(スライド 44) 繰り返しになりますけれど、平成 29 年から遺跡北東側の史跡指定地外の場所について調査を行っています。

### 1) 平成 29～令和 2 年度の調査成果 大型竪穴建物とその構造

(スライド 45) 平成 29 年から令和 2 年度にかけての調査では、大型の竪穴建物や掘立柱建物などが見つかりました。左側はその平面図で、右側は大型竪穴建物と掘立柱建物の場所を拡大した図です。

(スライド 46・47) 大型竪穴建物は一辺が 9.5m です。それに隣接して、一部は重なるのですが、一辺約 4 m の隅丸方形の竪穴

住居が見つっています。竪穴住居の方が新しく、大型竪穴建物を壊して竪穴住居をつくっていました。

この大型竪穴建物は一度建て替えを行っていることがわかっています。この黄色い破線で示したラインが建物の最初の壁の部分になります。そして、青い破線で示していますが、そのあとに拡張するように 1 度建て替えていることが分かっています。ただし、上屋を支える柱は 6 本で、建て替え前も建て替え後も同じ柱を利用している可能性が推測されます。そして繰り返しになりますが、大型竪穴建物を壊して約 4 m の竪穴住居がつけられるという変遷が分かっています。

(スライド 48) 大型竪穴建物の変遷についてももう一度細かく見ていきます。最初に、この黄色い破線部分で竪穴建物がつけられています。6 本柱の構造と推測されます。そして、建物の中央付近には穴が掘られていて、そこから排水用の溝が建物の外側へ延びていく構造であったと考えられます。なお、通常竪穴住居で確認される煮炊きをした炉の跡や、貯蔵穴が認められないことなども合わせて、ほかの竪穴住居とは異なる用途で建てられた、性格が異なる建物と推測されます。

また建物内中央から建物外へと延びる排水用の溝ですが、古津八幡山遺跡のほかの竪穴住居ではこういった排水溝は確認されおらず、6 本の支柱穴と同様に、この大型竪穴建物がほかの竪穴住居とは異なる内部構造であるということが言えるかと思えます。

(スライド 49) 建て替え後、建物を拡張しているのですが、柱は前と同じ柱を再利用していると考えています。そして、中央付近の土坑から外に延びていた排水溝は、壁際の溝から外へ延びる構造に変わっています。

(スライド 50) その大型竪穴建物の出土遺物です。弥生時代の終わり頃の時期、古津八幡山遺跡の最後のほうの時期の建物であるということが出土遺物から分かります。丘陵の上の環濠が埋まったあとにつくられた建物ということになります。

この大型竪穴建物では鉄製品のヤリガンナが1点出ています。砥石なども出ていますので、鉄製品を研いだりしていることがうかがえます。それと弥生土器ですが、弥生時代の終わりくらいになると東北系の土器が非常に少なくなっており、基本的に北陸系と呼んでいる土器に限られるというような変化も確認できます。

(スライド 51) そして、その大型竪穴建物を壊して隣に竪穴住居がつくられています。この竪穴住居については、4本柱で、貯蔵穴もあり、煮炊きをした炉の跡も確認できているので、居住用として使われたと推測されます。ただし、この竪穴住居にも壁際の溝から外へ延びる排水用の溝が確認できており、通常古津八幡山遺跡の竪穴住居とは少し違った構造の住居であると推測しています。

(スライド 52) これは古津八幡山遺跡の竪穴住居の大きさをプロットした図になります。古津八幡山遺跡では、大体5mくらいの竪穴住居が一般的な大きさですが、大型竪穴建物は一辺が9.5mということで、ほかの建物とは隔絶した大きさの建物であることが分かります。煮炊きをする炉がなく、また貯蔵穴もないということで、居住用ではなくて特別な用途で利用されたことが推測されます。

#### 北陸の大型建物

(スライド 53) 5本以上の柱で上屋を支える多柱構造や、排水用の溝を持つ事例というのが、古津八幡山遺跡の他の建物では確認できないのですが、北陸地方の大規模な拠点集落の中に、大型の建物で多柱構造

をとり、中央付近の土坑や壁際の溝から建物外へと排水溝が延びる建物が散見されています。恐らく、そういった北陸地方の拠点集落の首長とのネットワークの中で、古津八幡山遺跡の大型竪穴建物がつくられた可能性が考えられます。左は石川県小松市の遺跡で、右は富山県高岡市の遺跡です。どちらも地域の拠点的な集落で、そういった建物をもつ遺跡が面的に広がるのではなく点と点で、有力な首長同士の間で出現してくるのであろうと推測をしております。

#### 2) 令和3・4年度の調査成果

(スライド 54) 次に令和3・4年度の調査成果について見ていきます。これまで見てきた大型竪穴建物はここですね。そこから尾根に沿ってさらに150mくらい北へ進んだ場所を令和3年から調査をしています。この黒く塗られている部分が現在登録されている古津八幡山遺跡の範囲なのですが、令和3年度にその遺跡範囲のさらに外側を調査したところ、方形周溝墓と呼ばれるお墓や竪穴住居などが新たに見つかりました。

(スライド 55) これは令和3・4年度に調査した場所の平面図です。標高が23mくらいの緩斜面域、あるいは平坦面域に位置します。四角い部分が調査を行った範囲です。全体を面的に調査しているわけではなく、調査区を設定し、その部分を調査して遺構があるかどうかを確認するという調査を行っています。そうしたところ、緑色の部分が竪穴住居ですが、竪穴住居が3棟見つかりました。それと、去年の調査で方形周溝墓というお墓が丘陵の中腹域で初めて見つかりましたが、さらに今年の調査で、その北側にもう1つ方形周溝墓が見つかりました。

#### 令和3・4年度に確認された竪穴住居

(スライド 56) それでは写真で見てみたいと思います。これは令和3年度に見つ

かった竪穴住居 SI728 の写真になります。一辺が約 5 m の隅丸方形の建物と推定しています。一部しか掘っていませんが、柱が 2 本見つかり、4 本柱の建物と推定しています。この建物からは鉄鏃なども出土しています。出土遺物から、弥生時代の後期後半という時期の竪穴住居と推測されます。丘陵の上で環濠に囲まれた集落が繁栄している時期の竪穴住居が見つかりました。この竪穴住居は 1 回建て替えて行っていて、最初は少し小さい大きさであったのを、少し外側に広げて建て替えています。

(スライド 57) 令和 4 年の調査でも竪穴住居が 2 棟見つかりました。これは竪穴住居 SI802 の写真です。これも一部しか掘っていませんが、写真のもっと左側まで住居の範囲は広がります。建物の外側には、雨水などを排水するための周溝を持っています。これも出土土器から弥生時代の後期後半と推測されます。直径が約 5.5m ほどの丸い形状の建物になるのではないかと推定しています。

(スライド 58) もう 1 棟、北側で建物が見つかりました。これについては、竪穴部分が削平により確認できないのですが、周りの周溝と柱穴が確認できました。一辺約 6 m の隅丸方形の竪穴住居と推定しています。柱穴が 3 つ見つかり、こちらでも 4 本柱で上屋を支える構造の竪穴住居であろうと推定しています。写真の手前側が東側になりますが、周溝の東側についても削平により途切れて確認できないといった状況でした。一辺約 6 m と古津八幡山遺跡の中では、比較的大型の建物と推定しています。この建物も、出土遺物から弥生時代の後期後半、頂上部の環濠がまだ機能している時期の建物と推測されます。

#### 丘陵中腹域の竪穴住居

(スライド 59) この丘陵中腹域において、上の環濠が機能している時期の竪穴住居が

いくつか見つかったということでお話をさせていただきました。大型の竪穴建物は、環濠が機能しなくなったあと、弥生時代の終わり頃、古津八幡山遺跡の最後の段階の建物です。丘陵の南東部分にも緑色に塗られた場所がいくつかありますが、これも弥生時代の終わりくらいの時期の建物です。ですので、これまでは上の環濠が機能しなくなったあと、竪穴住居が環濠の外側に広がっていくのだろうと考えていたのですが、令和 3・4 年度の調査では、上の環濠が機能している段階の竪穴住居が 3 棟見つかりました。これによって、頂上部分の環濠がまだ機能していて、頂上部分が集落の中心であった時期に、遺跡北東部の中腹域でも住居が形成されていたということが明らかになってきました。そのため、頂上部と中腹域でどのような空間利用のされ方に違いがあったのか、あるいは、頂上部につくる建物と中腹域につくる建物とで、どういった違いがあるのかなど、少しわからなくなってきたといえますか、今後の課題であろうと考えております。

#### 令和 3・4 年度に確認された方形周溝墓

(スライド 60) 次にお墓の話をしていただきます。令和 3 年度の調査で、大型の方形周溝墓、SZ743 が丘陵中腹域で新たに発見されました。そして今年、令和 4 年度の調査で、SZ743 の北側においても一つ方形周溝墓、SZ822 が発見されました。お墓の時期ですが、大型の方形周溝墓については、出土遺物から弥生時代の後期後半から末の時期のお墓と考えています。また、北側の方形周溝墓については、土器が出土していないため細かい時期がわからないといった状況です。ただし、先ほど説明をした竪穴住居 SI821 の周溝を壊して方形周溝墓 SZ822 の周溝がつくられており、竪穴住居 SI821 が弥生時代の後期後半と推測されるので、方形周溝墓 SZ822 はそれよりも新し

いということまでは言えます。

(スライド 61) これは令和 3 年度の調査で見つかった大型の方形周溝墓の平面図です。上が北の方角になります。令和 3 年度の調査では東側の周溝がはっきりしませんが、令和 4 年の調査で東側の周溝が確認され、それによりこの方形周溝墓の形や規模を確定することができました。この方形周溝墓は周溝の四隅が途切れる形態で、周溝の内側で計測すると、南北方向で 9.6 m、東西方向で 8.4m の大きさです。また、令和 3 年度の調査では埋葬部 1 と埋葬部 2、埋葬部 3 が見つかっていましたが、令和 4 年の調査で埋葬部 2 に隣接してこの埋葬部 4 が新たに見つかり、1 つのお墓の内部に合計 4 つの埋葬施設を持つということが判明しました。

(スライド 62) これが大型の方形周溝墓の写真です。4 辺に周溝を持っていて、その内部に埋葬施設が 4 基つくられているお墓であるということが確認できました。

(スライド 63) これは少し角度が違う所からの写真です。埋葬部が 4 基あるお墓ということで、そういった弥生時代の複数埋葬というのは新潟県で初の事例で、東日本でも非常に珍しいかと思います。複数埋葬を行うお墓というのは、西日本に分布が多い状況です。

(スライド 64) これは方形周溝墓から出土した資料になります。保存目的の調査ということで、基本的にはあまり掘らずに、遺構の把握を最優先にした調査を行っています。といいますのも、将来研究がさらに進展した段階に再検証できるように、あるいは新たな技術でより精度の高い発掘手法で将来発掘できるように、ということでそのような調査を行っています。そのため、出土遺物はそれほど多くはないのですが、一部掘った中からこういった資料が出土しています。土器では壺や甕、これらについ

ては周溝から出土しています。また、中心となる埋葬部 1 からは高杯の脚部、それと完形のガラス玉が 1 点出ています。下のガラス玉は、周溝から少し欠損をした状態で出ています。埋葬部 1 からは、他に石鏃が 2 点出土しています。左側は完形、右側は欠けた状態の石鏃です。

(スライド 65) これは東側から見た 4 つの埋葬施設の写真です。合計 4 つの埋葬施設がありますが、その中で中心となる埋葬施設はこの埋葬部 1 と考えています。白い破線で示しているのが、埋葬するために掘った穴の範囲です。墓壙（ぼこう）などと呼んだりしますけれど、その外側のラインです。通常、墓壙を掘ってその中に棺を入れて埋めるということになるのですが、埋葬部 1 では、大きい墓坑を掘ったあとに、黄色い破線で示している板材で囲い、さらにその板材で囲った空間の中に木棺を入れておけると考えられるのです。こういった施設を木槨、木槨構造などというのですが、木槨という木で部屋をつくって、その中に棺を入れるというような埋葬形態であるということが、今年の調査で分かったわけです。

(スライド 66) これは埋葬部 1 の写真です。最初広く墓壙を掘って、その中に板材を四方に立てて空間をつくり、その空間の中に木の棺を置く、という構造であったと考えられます。ちなみに木棺部分については、幅が 0.8m、長さが 1.9m ほどと推測されます。木槨部分については、外寸で幅が 1.2m、長さが 3 m を測ります。

(スライド 67) 下のイラストは木槨のイメージのイラストです。板で囲った空間の中に、さらに木の棺を入れる構造です。木の棺と板材との間が空間になる構造ですね。埋葬部 1 もこのような木槨の構造だったと考えています。

写真は埋葬部 1 の中央部分の断面写真で



す。木槨と考える板材がこの黄色いラインです。その板材の下部には、オレンジ色の破線で示しましたが、平らな土が置かれていました。そして板材の外側、墓壙との間は硬い粘土っぽい土で固められていました。まず墓壙を広く掘ったあとにその中に板材を立てて、その間を硬い土で固めて板材が倒れないようにし、さらにその板材の内側下部には水平に土を敷いて整地をする。そして、赤色で示していますが、その中に棺を置いたと考えています。そのあと、棺の蓋をし、さらに木槨の蓋をして、その上を土で覆って完成する順番が復元できます。その後、木槨や木槨の板材が腐って上から土が内部へと流入し、さらに後世に墓の上部が削平を受けて、黒い点線部分より下しか昔の土が残っていないといった現在の堆積状況になったことが、土の観察から推測できるわけです。

(スライド 68) なお、ほかの埋葬部 2、3、4については、木槨構造ではなく木棺を直接埋めた埋葬施設であるということも分かりました。右下は埋葬部 2 の断面の写真ですが、墓壙を広く掘ったあとに木棺を中に入れていたことがわかります。幅が約 0.6m の木棺を入れていて、その外側、墓壙との間を土で埋めています。木棺の模式図が右上にあります。埋葬部 2、3、4 はこのように木棺を墓壙に直接埋める埋葬形態でした。木棺直葬（じきそう）と呼んだりします。

(スライド 69) これは令和 3 年度の調査が終わった段階の復元イメージのイラストです。その段階では 3 つの埋葬施設が見つかったわけですが、令和 4 年度に新たにもう 1 つ埋葬施設が見つかったの、これからまたもう 1 つ、このイラストに埋葬施設を追加しないといけません。また、東側の周溝もはっきりしていませんでしたが、令和 4 年の調査で見つかったの、東側の

周溝についても新たに書き加えないといけません。さらに、中心となる埋葬部 1 については木棺ということでイラストを描いていましたが、これも調査で木槨墓であると考えられますので、イラストを修正しないとけないといった状況です。

(スライド 70) 令和 4 年度の調査で、これまで見てきた大型の方形周溝墓のさらに北側で、新たにもう 1 つ方形周溝墓が見つかりました。こちらについては、一辺が約 5 m とやや小型の方形周溝墓です。先ほどの大型の方形周溝墓と違い、周溝が隅で途切れない形態です。このように、周りを掘るとこのようなお墓が点々と見つかることが推測されるわけですが、令和 3・4 年の調査によって、この場所が墓域として利用されていたということがわかってきました。

#### 令和 3・4 年度調査成果のまとめ

(スライド 71) 以上、令和 3・4 年の調査をまとめますと、竪穴住居が 3 つ見つかっていて、その 3 つとも弥生時代の後期後半という時期、まだ丘陵上の環濠が埋まっておらず、その中で集落が繁栄していた時期の建物が中腹域でも見つかったということになります。そして、方形周溝墓については、その竪穴住居のあと、上の環濠が埋没し始める時期、あるいは埋没したあとのお墓と考えています。ですので、最初は居住域として利用されていて、そのあとに墓域として利用されるようになったという変遷が追えるかと思えます。

ちなみにこの部分、10T 1 の調査区を拡大したのが左側にありますけれど、2 つの柱穴がここで見つかっています。柱を抜いたあとに、弥生土器を意図的に中に入れていたと考えられます。一部しか調査をしていないので、柱穴の広がりわかりませんが、おそらく掘立柱建物があったであろうと考えております。これについては、土器を柱の穴の中に埋め込んでいるので、儀礼

的な建物の可能性も考えられるかと思いません。方形周溝墓と近接しているので、お墓の儀礼などに関わるような建物かもしれません。

#### 古津八幡山遺跡における墓の変遷

(スライド 72) 古津八幡山遺跡のお墓の変遷をまとめた図です。これについては縮尺が同じですので、大きさの違いがわかるかと思えます。最初に鹿角装鉄剣が出たお墓で、SX1005 ですね。右側に書いてある数字はお墓の大きさで、3 m くらいの方角周溝墓が、古津八幡山遺跡の弥生時代の後期に最初につくられたと考えられます。そのあと、SX1005 に隣接して方形周溝墓、SX1004 がつくられたと考えられます。そのあとのお墓がよくわからなかったのですが、昨年調査で見つかった大型の方角周溝墓の SZ743 がそのあとにつくられたお墓であろうと、出土遺物から推測されます。さらに今年調査で見つかった方形周溝墓 SZ822、時期は今のところはっきりとしませんが、竪穴住居の SI821 の周溝を壊してつくられているのでそれよりも新しい時期といえ、場合によっては大型の方角周溝墓のあとにつくられた可能性があるのかなと考えています。

頂上部分の前方後方形の周溝墓については、古津八幡山遺跡の最後の時期、弥生時代の終わりの時期で、そのすぐあとに古墳時代になるといった変遷を想定しています。昨年見つかった大型の方角周溝墓ですが、やはりそれまでの方角周溝墓に比べて、サイズの非常に大きな方角周溝墓が丘陵の中腹域につくられるようになったということが分かるかと思えます。

(スライド 73) これが鹿角装鉄剣が出た、丘陵の上につくられた方形周溝墓 SX1005 です。大きさは溝の内側で 2.8m×3.1m くらいです。昨年見つかった方形周溝墓 SZ743 は、一辺がその約 3 倍の長さで、面積

では 9 倍ほどの大きさということになります。

(スライド 74) 棺の大きさについては、棺の幅が約 0.5m で、長さが約 1.6m、その中から鉄剣や石鏃が出たわけですが、去年の調査で見つかった大型の方角周溝墓 SZ743 の中心埋葬施設である埋葬部 1 については、木棺の痕跡から幅が 0.8m、長さ 1.9m というので、棺の大きさも大型化してると考えられます。ほかの埋葬部 2、3、4 についても、木棺の幅は 0.6m くらいで長さが 1.8 から 2 m くらいと推定され、やや大型化していると考えられます。

#### 木槨構造の埋葬施設

(スライド 75) 奈良県の橿原考古学研究所の副所長をされている岡林孝作さんが木槨についてご研究をされており、これは岡林さんがつくられたものに古津八幡山遺跡を追加した国内の木槨墓の一覧になります。岡林さんには令和 4 年の発掘調査中に古津八幡山遺跡の現場を見ていただき、いろいろご指導をいただきました。現在、日本国内の木槨墓、確実な例が大体 30 例ぐらいあるということです。岡林さんの分類で A 類、B 類、C 類というふうに分けられていて、分類ごとに色分けをしたのですが、このオレンジ色の部分が A 類、紫色の部分が B 類、薄ピンク色の部分が C 類となります。A 類から B 類、B 類から C 類というように、時期や時代を追って木槨墓の分類の主体が移っていくということになりますが、古津八幡山遺跡についてはその中の B 類になります。この赤く囲った部分が古津八幡山遺跡の埋葬部 1 です。

この B 類というのは、弥生時代の後期という時期と終末期という時期に認められています。木槨墓が現在国内で 30 例程度見ついているということですが、いずれも各地の有力な墳丘墓の中心的な埋葬施設にこの木槨形式が採用されているということで、

弥生時代の最も上位クラスの埋葬形態がこの木槨墓というふうには考えられています。古津八幡山遺跡の埋葬部1のB類を見ますと、弥生時代の後期後半を中心として、岡山県ですとか、島根県、香川県に分布しています。瀬戸内海から山陰にかけて分布の中心があるということです。基本的に東日本にはないのですけれど、古津八幡山遺跡の一番近くですと、石川県の津幡町という所で、1つ木槨墓があるということです。加賀、能登、越中を結ぶ重要な要衝にある場所の遺跡ということで、そこで1つ木槨墓が見つかっています。しかし、それよりも西になると山陰まで行ってしまうという状況です。そのような分布において、古津八幡山遺跡で今回木槨構造の埋葬施設が見つかったということで、まさに日本海ルートを介して点と点で古津八幡山遺跡へ入ってきたという状況が推測されます。

#### さいごに

(スライド 76) 以上をまとめますと、弥生時代の後期という時期に古津八幡山遺跡は出現をして、西暦の250年くらいまで集落があったようです。古い時期には中腹域でも建物が見つかったので、どうも環濠に囲まれた丘陵の上と中腹域とで住み分けが行われていたということがわかってきました。さらに、弥生時代の終わりくらいの時期になると、大型の方形周溝墓や大型の竪穴建物などが丘陵中腹域につくられるということもわかってきました。丘陵中腹域がやや特殊な空間として認識されていたのかもしれない。

また、大型の竪穴建物に見られた排水溝や多柱構造の事例、さらには先ほど見た方形周溝墓の木槨墓の分布、あるいは複数埋葬事例の分布などを考えると、大型の方形周溝墓や大型の竪穴建物がつくられる弥生時代の終わりくらいの時期になると、西方、西日本とのつながりが強くなっている可能

性が推察されるわけです。そして、この時期に大きな変化が社会の中で起こっていたのだらうなということも推測させてくれます。弥生時代から古墳時代にかけての激動期の社会の変化を、古津八幡山遺跡で見られる遺構や、遺跡の動向が反映しているのだらうと考えております。

(スライド 77) 以上で話は終わりになります。平成29年から行った史跡の指定地外の調査で、大型の竪穴建物や方形周溝墓など、史跡指定されている丘陵頂上部を中心とする場所に劣らない重要な遺構が見つかり、また古津八幡山遺跡の全体像を考えると、また古津八幡山遺跡の全体像を考えると、また古津八幡山遺跡の全体像を考えると、うで欠かせない、非常に重要な調査成果が得られたと思います。今後、史跡の指定範囲の見直し、追加指定などについても検討していく予定であり、将来的には頂上部と一体となった保存活用を行い、市民の皆さまからもさらに利用していただけるようになればいいと考えております。以上で終わらせていただきます。ご清聴どうもありがとうございました。

弥生の丘展示館 企画展関連講演会 2022.11.20 新津美術館市民ギャラリー

## ここまでわかった！古津八幡山遺跡 —最新の調査成果を交えて—

新潟市歴史文化課 文化財センター 相田泰臣



1. はじめに  
2. 古津八幡山遺跡の概要  
3. 最近の調査成果を交えて見た古津八幡山遺跡

古津八幡山遺跡遠景(北東から)

スライド1

# 1. はじめに

スライド2

## これまでの発掘調査

- 遺跡が最初に発見された1987(昭和62年)の第1次発掘調査から、これまで25回の発掘調査を実施。

平成29年度から調査が不十分な場所について再び発掘調査を行っている。

⇒古津八幡山遺跡で最大の大型竪穴建物発見  
⇒古津八幡山遺跡で最大の方形周溝墓発見

スライド3

## 古津八幡山遺跡の保存

⇒ 地元をはじめ、全国的な保存運動がおこる




講演会(甘粕健氏・坂井秀弥氏 1988年) 発掘調査現地説明会(1988年)

- 1990(平成2)年、遺跡の主要部分が保存されることに決まる。

スライド4

## 史跡の指定




- 2005(平成17)年7月14日  
「古津八幡山遺跡」として国の史跡に指定
- 2011(平成23)年2月7日  
古墳部分が追加指定される

スライド5

以下の文化財の総称を記念物と呼ぶ。

- 貝塚・古墳・都城跡・城跡旧宅などの遺跡で我が国にとって歴史上または学術上価値の高いもの
- 庭園・橋梁・峡谷・海浜・山岳などの名勝地で我が国にとって芸術上または鑑賞上価値の高いもの
- 動物・植物及び地質鉱物で我が国にとって学術上価値の高いもの

国はこれら記念物のうち、重要なものをその種類に従って「史跡」・「名勝」・「天然記念物」に指定し、保護を図っている。

菰蒲塚古墳 旧新潟税関 新津油田金津鉾場跡

史跡とは

スライド6

## 新潟市内の史跡

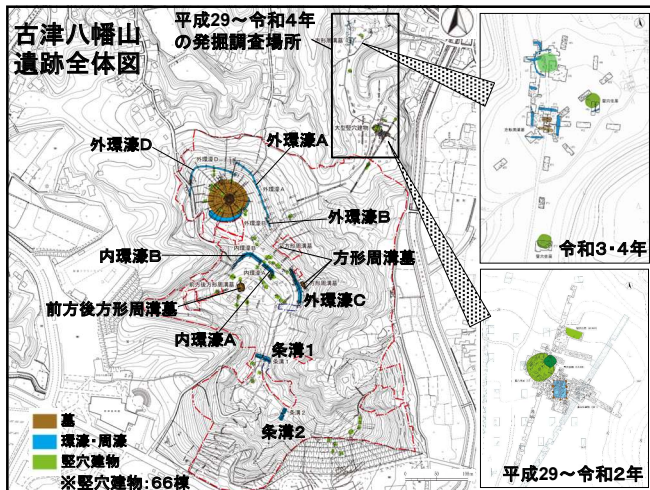
- 西蒲区 菖蒲塚古墳（昭和5年 国指定）  
日本海側最北の前方後円墳
- 中央区 旧新潟税関（昭和44年 国指定）  
幕末～明治初期の開港五港の中で唯一現存する開港当時の運上所（税関）
- 秋葉区 古津八幡山遺跡（平成17年 国指定）  
日本海側最北域の高地性環濠集落。古墳時代には県内最大の古津八幡山古墳が造られる。
- 秋葉区 新津油田金津鉞場跡（平成30年 国指定）
  - 西区 的場遺跡（県指定）
  - 西区 緒立遺跡（県指定）

スライド7



古津八幡山遺跡遠景(北東から)

スライド8



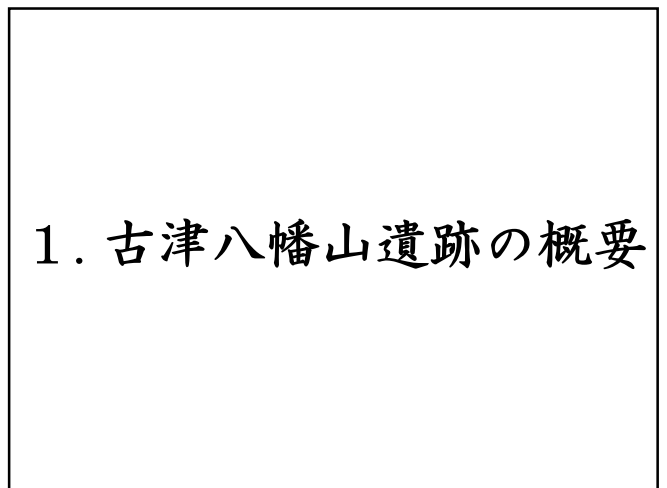
スライド9



スライド10



スライド11



スライド12

時代	古津八幡山遺跡	特徴
旧石器時代	市内の最古の石器が残される	
縄文時代	草創期	
	早期	
	前期	東側の谷でクリやトチの木の手入れがされる
	中期	北東地区で竪穴住居がつけられる
弥生時代	前期	
	中期	丘の上に濠が掘られ、村がつけられる
	後期	四角い墓にムラ長が葬られる
	終末期	前方後方形周溝墓がつけられる
古墳時代	前期	県内最大の蒲原の王墓がつけられる
	後期	
飛鳥時代		
奈良時代		
平安時代		炭窯で炭が焼かれ、製鉄炉で鉄がつけられる
鎌倉時代		

### 古津八幡山遺跡年表

【H29～R4年の調査】

竪穴建物5棟  
方形周溝墓2基  
大型竪穴建物1棟

スライド13

時代	北陸西部編年	古墳集成編年	新潟シンボジウム編年	古津八幡山遺跡	注
弥生時代中期	小松			環濠	
	専光寺			竪穴建物	
弥生時代後期	1群			環濠	
	V-1群		1期	集落の出現 外環濠の掘削	SI802・SI821 SI0603 SI03S03 SI03S05 SI0602 SI728
	V-2群	稲橋式	2期	環濠が上層まで埋没 ⇒一部再掘削? 内環濠掘削?	大型竪穴建物(SI1) 竪穴住居(SI485)
	2-1群	法仏式	3期		掘立柱建物群?
	2-2群	法仏式	4期		方形周溝墓 SX1005 SX1006 SX1004 SX743 (大型方形周溝墓) S2822
	3群	月影式	5期	高地性集落の廃絶、平地での集落の出現	前方後方形周溝墓 (SX03S14)?
	4群	白江式	6期		
	5群		7期		
	6群		8期		
	7群	日野の石式	9期		
古墳時代前期	8群		10期		
	9群	高島式			
10群					I 古津八幡山古墳 (古墳中期)

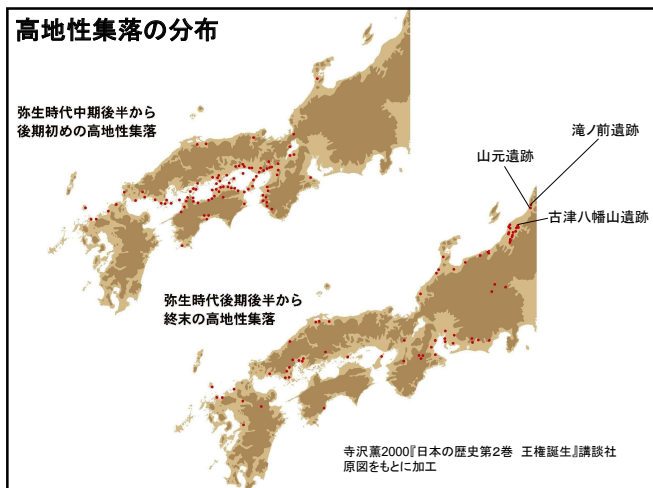
スライド14

① 弥生時代  
高地性環濠集落

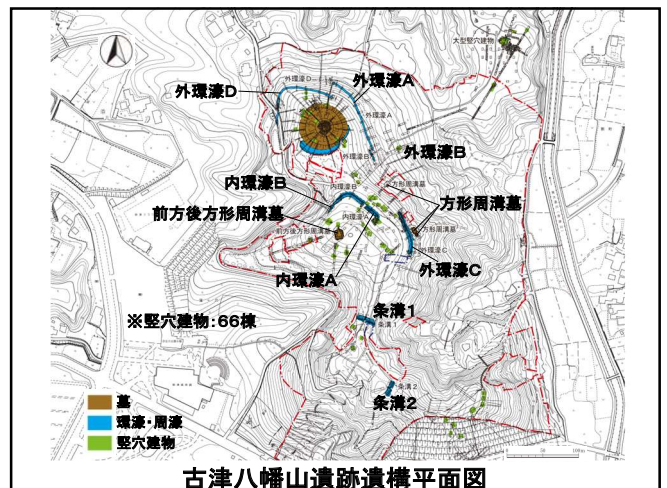
スライド15



スライド16



スライド17



スライド18



条溝

スライド19



環濠

スライド20



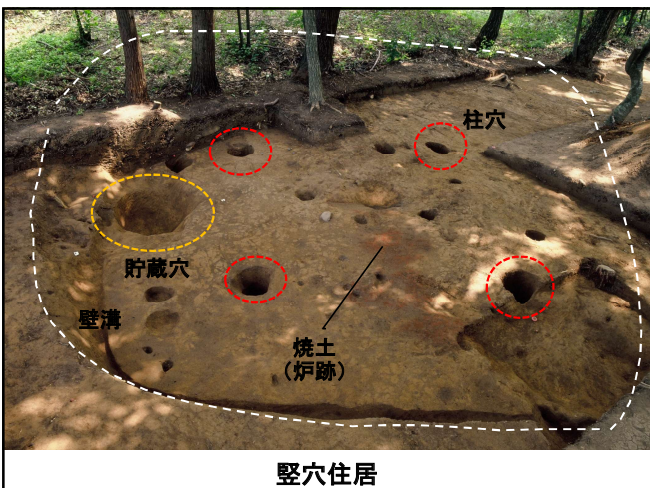
環濠

スライド21



環濠(復元整備後)

スライド22



竪穴住居

スライド23



竪穴住居(復元整備後)

スライド24



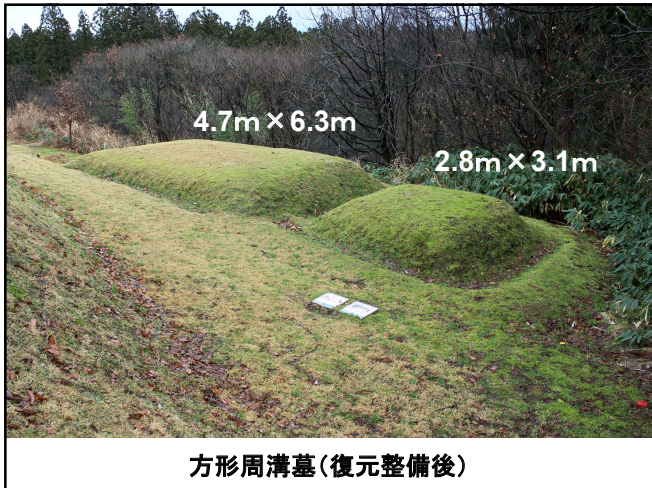
方形周溝墓

スライド25



方形周溝墓埋葬部

スライド26

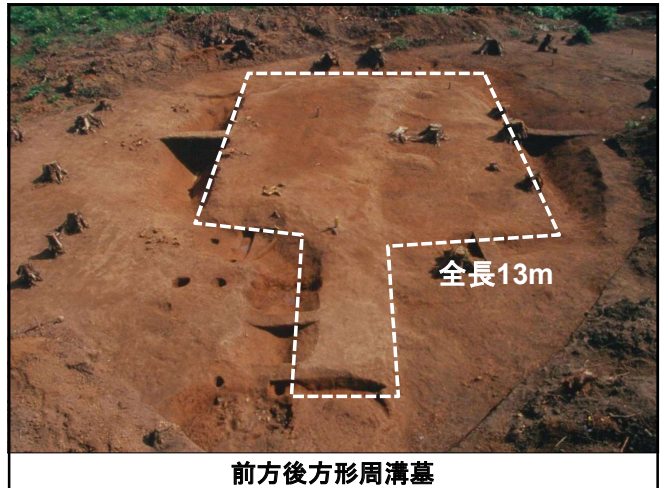


4.7m × 6.3m

2.8m × 3.1m

方形周溝墓(復元整備後)

スライド27



前方後方形周溝墓

スライド28



前方後方形周溝墓(復元整備後)

スライド29

古津八幡山遺跡出土土器の系統別イメージ

土器の特徴		
東北系	天王山式	縄文とヘラで描いた文様
北陸系	摺槽式・法仏式	薄板で土器の表面をなでる(ハケ目)
地元系	八幡山式	東北的な器形に北陸的なハケ目による整形手法
その他外来系	長野系(箱溝式)	櫛描文・赤い土器

北陸系土器

東北系土器

地元系土器(折衷土器)

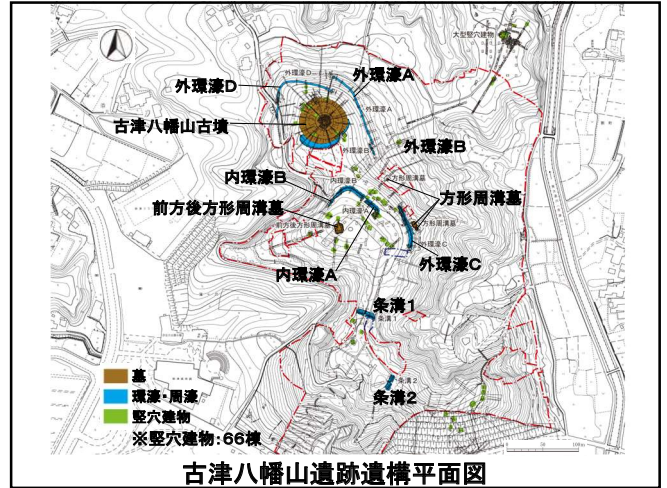
古津八幡山遺跡出土土器

スライド30

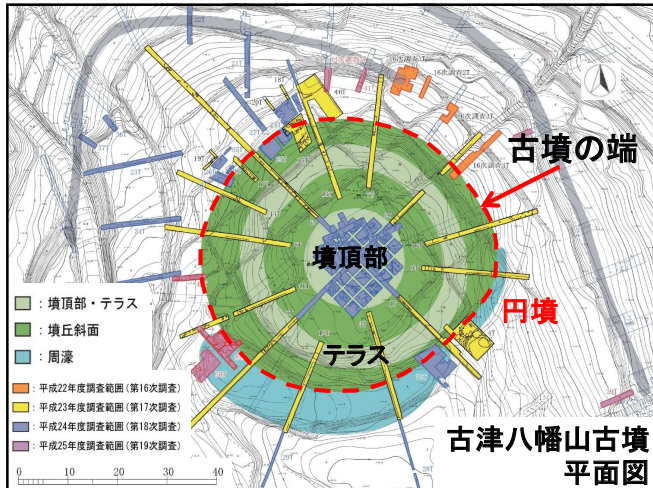


## ②古墳時代 古津八幡山古墳

スライド31



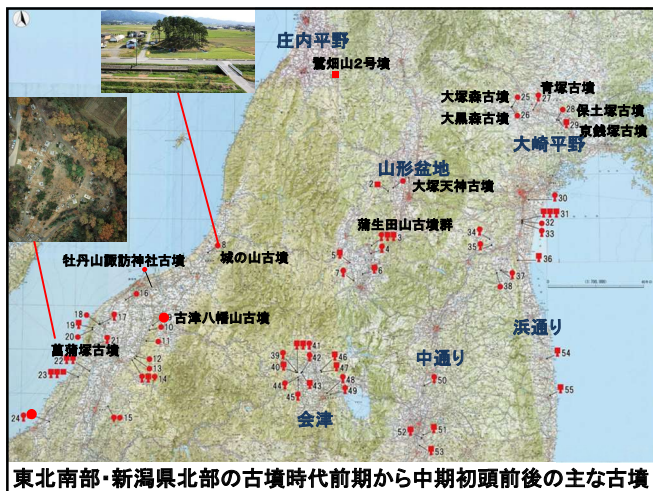
スライド32



スライド33



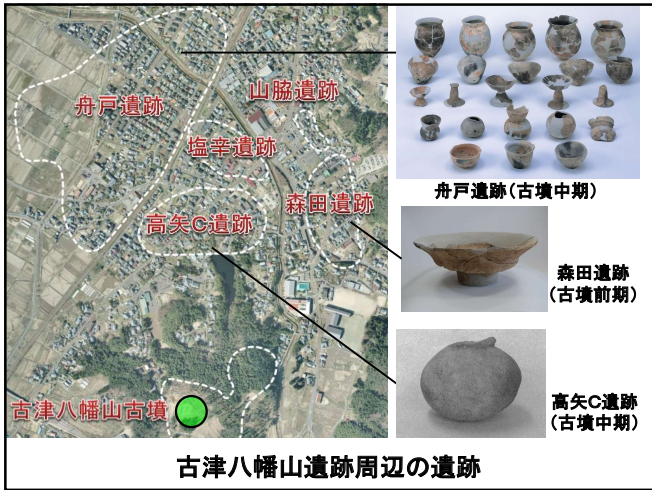
スライド34



スライド35

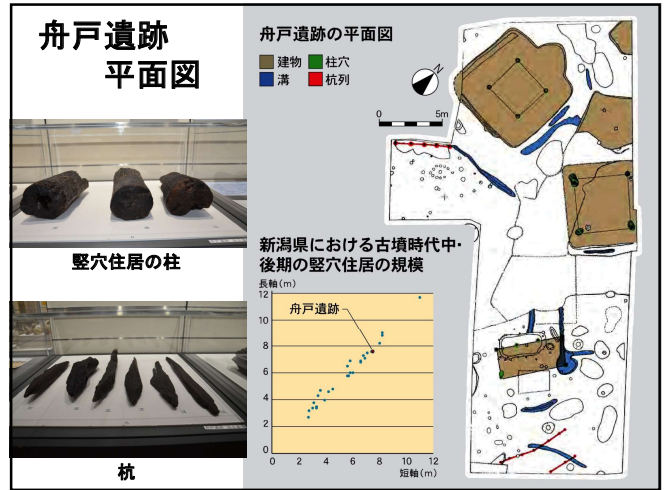


スライド36

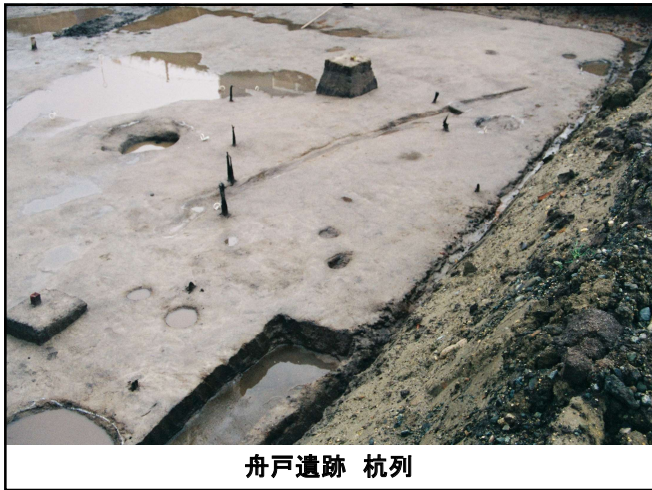


古津八幡山遺跡周辺の遺跡

スライド37



スライド38



舟戸遺跡 杭列

スライド39

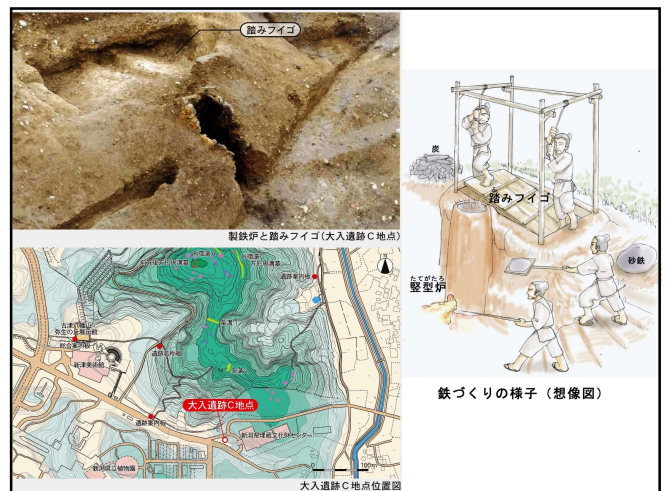


舟戸遺跡 竪穴住居

スライド40

③奈良・平安時代  
金津丘陵製鉄遺跡群

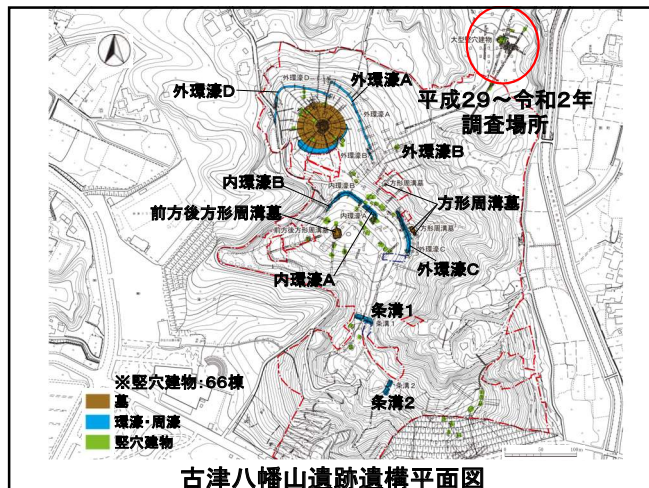
スライド41



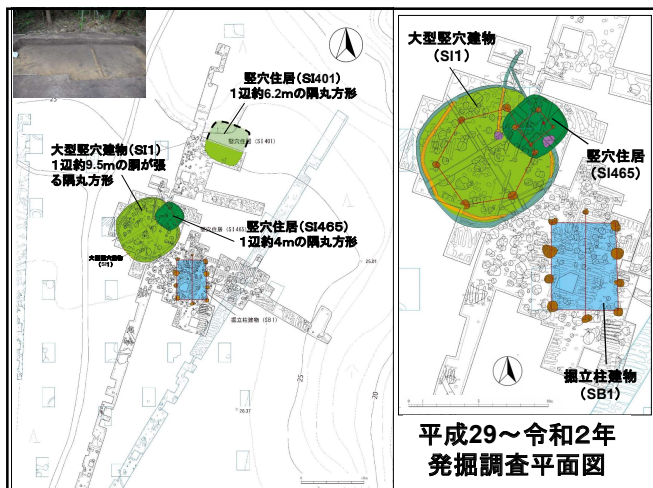
スライド42

### 3. 最近の調査成果を交えて見た古津八幡山遺跡 (弥生時代)

スライド43



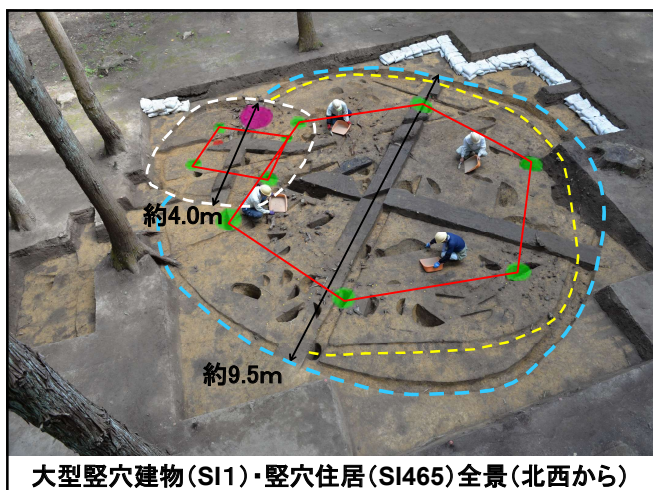
スライド44



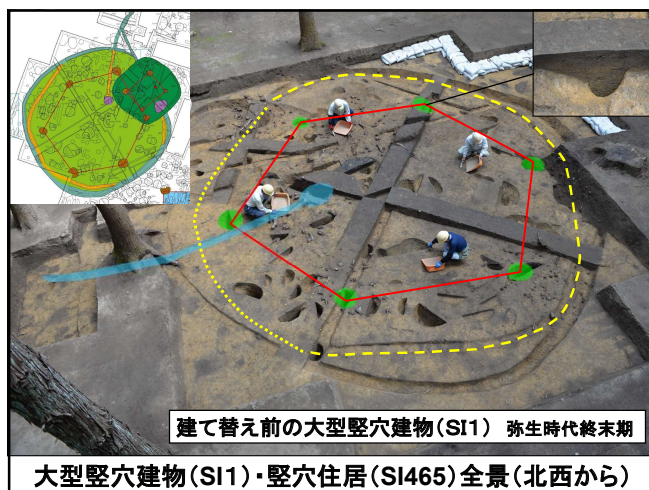
スライド45



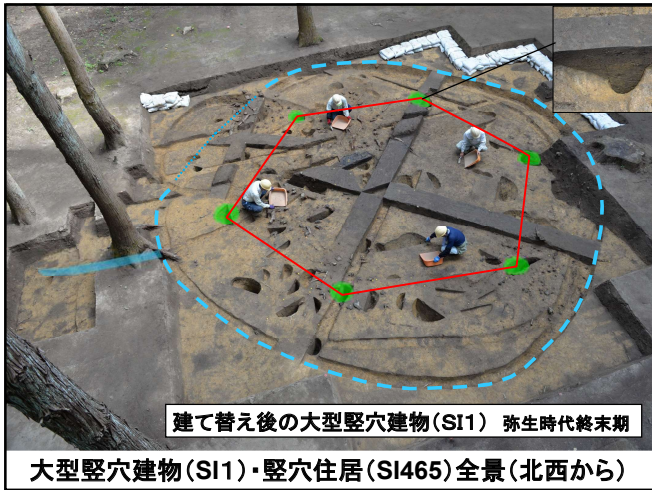
スライド46



スライド47



スライド48



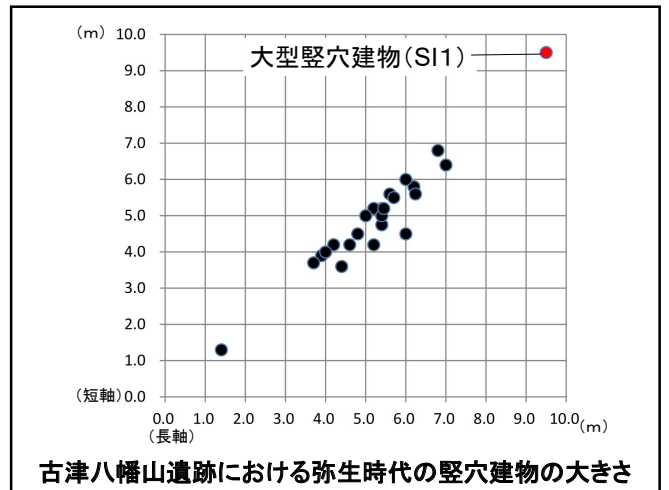
スライド49



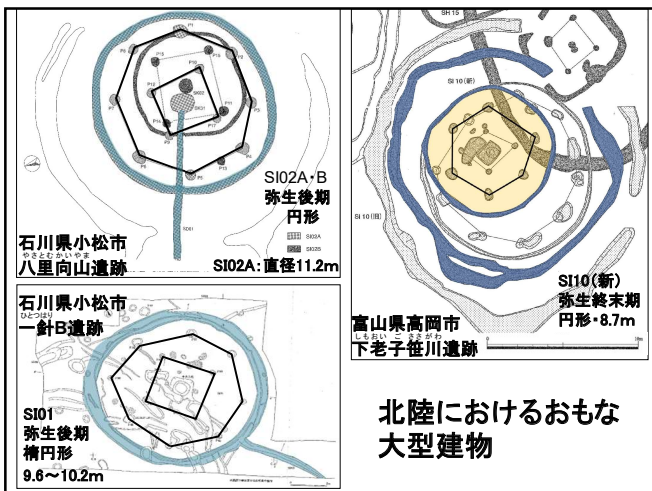
スライド50



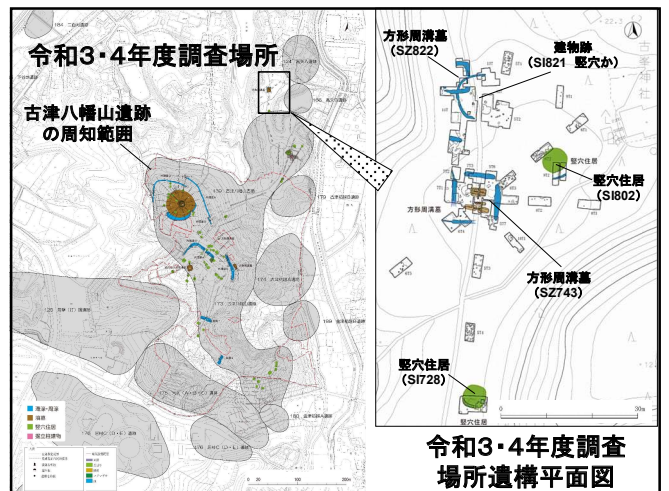
スライド51



スライド52



スライド53



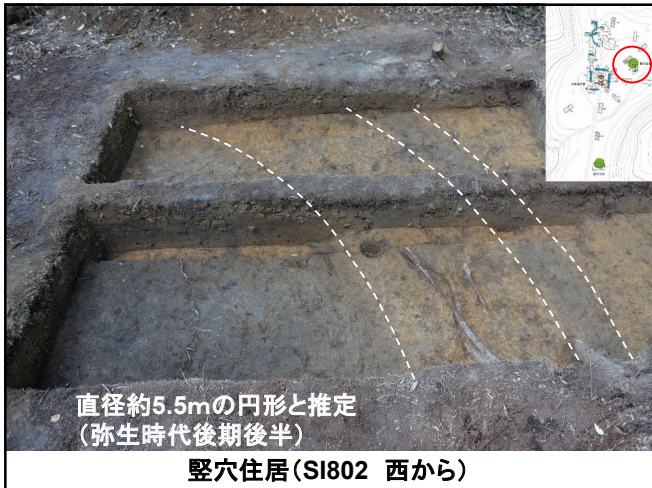
スライド54



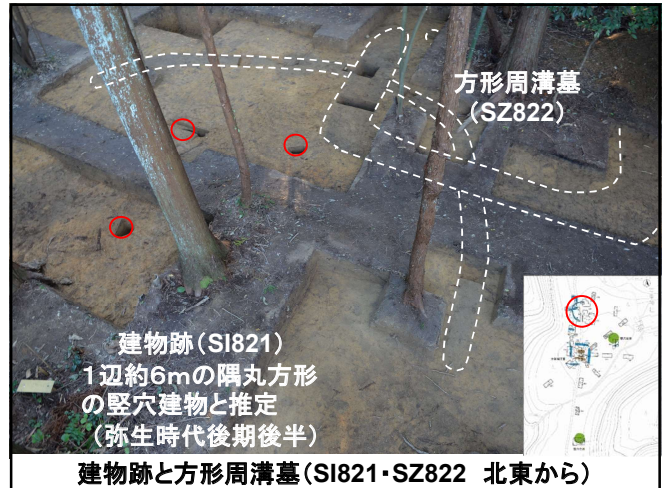
スライド55



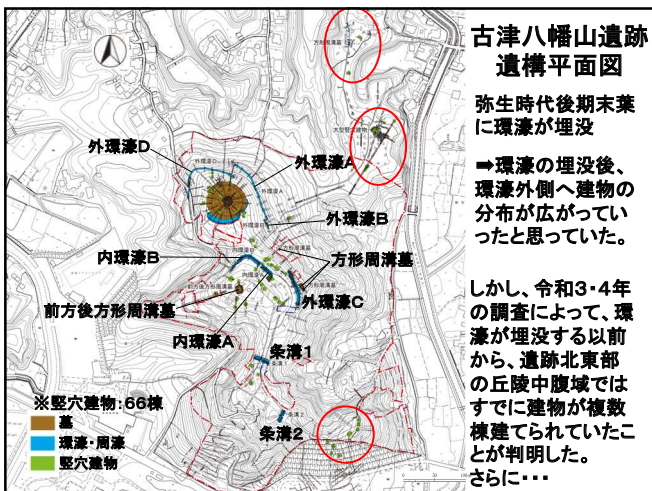
スライド56



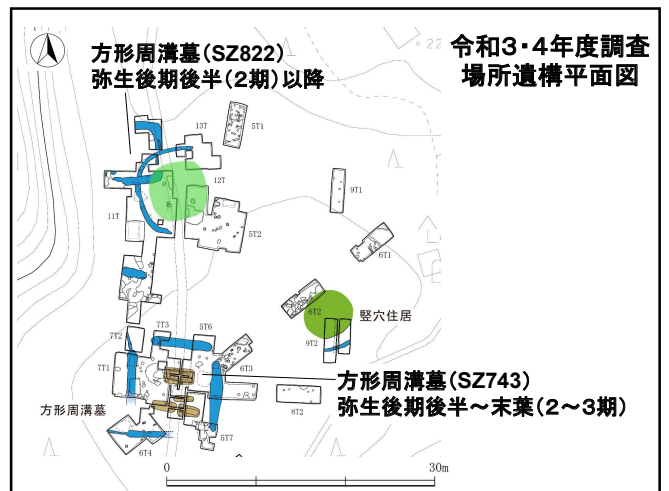
スライド57



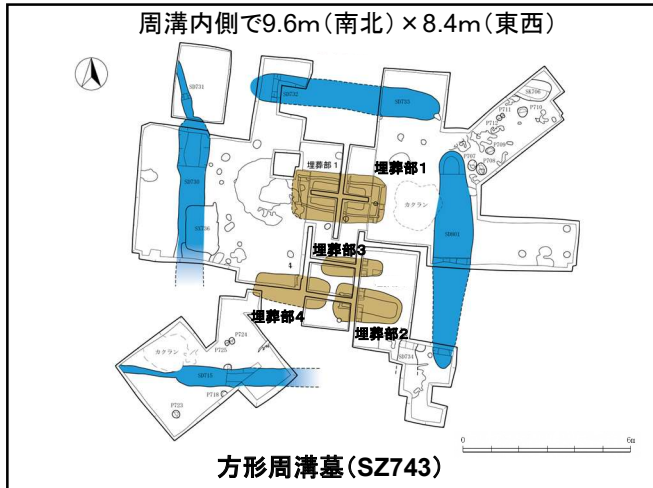
スライド58



スライド59



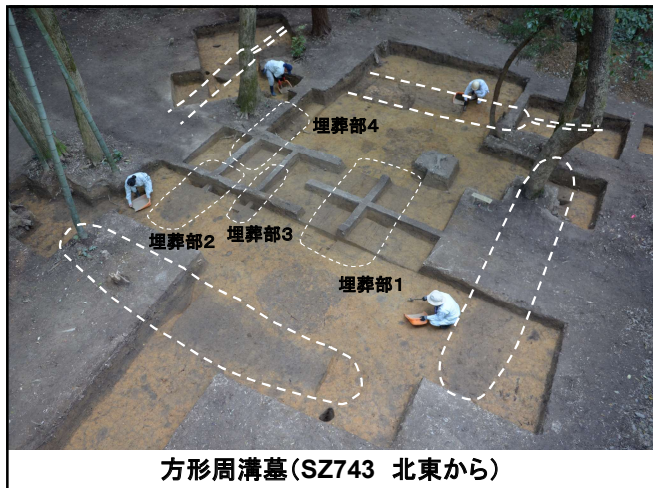
スライド60



スライド61



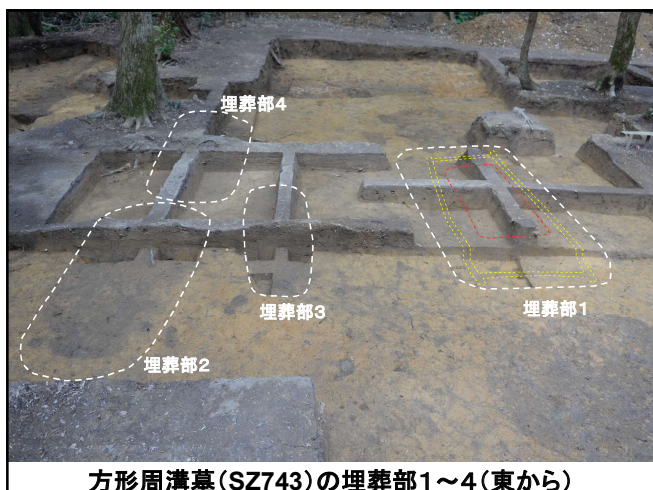
スライド62



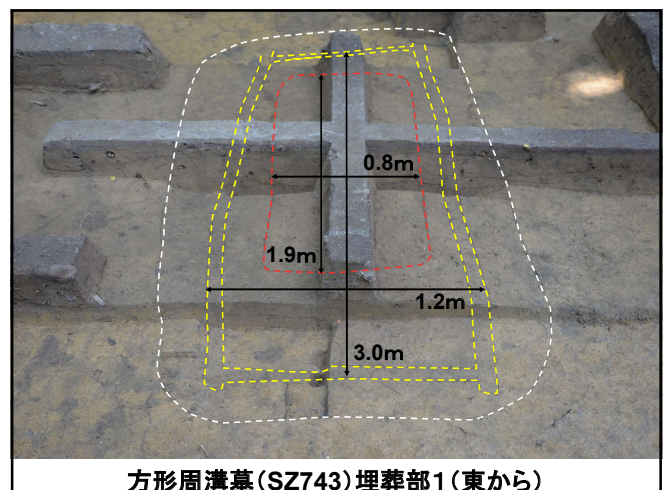
スライド63



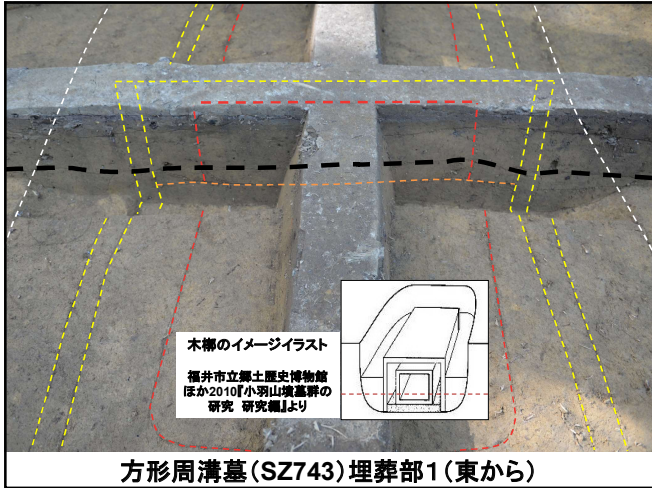
スライド64



スライド65

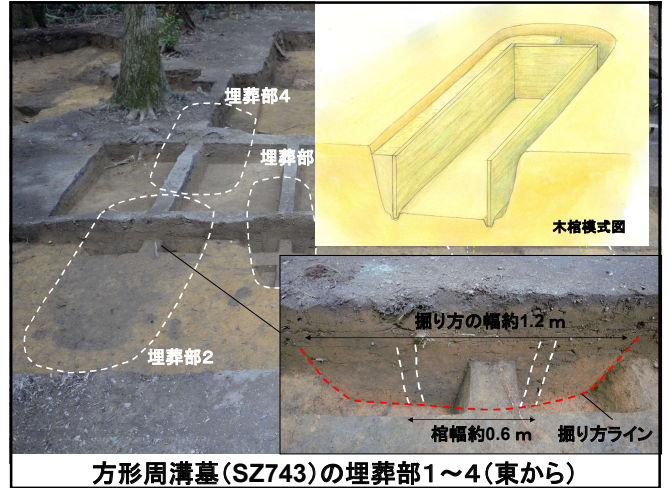


スライド66



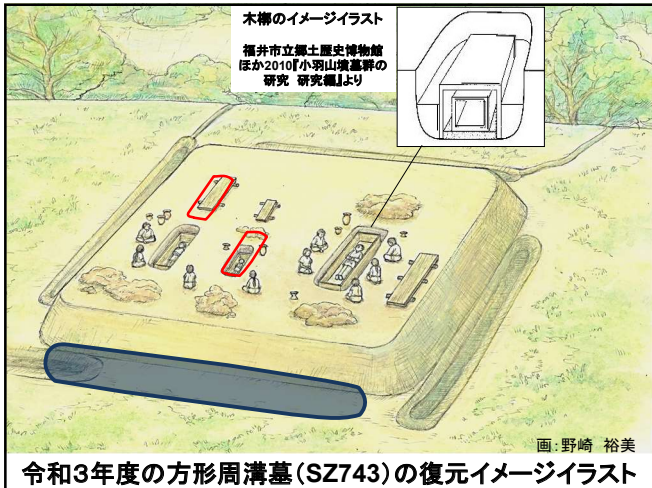
方形周溝墓(SZ743)埋葬部1(東から)

スライド67



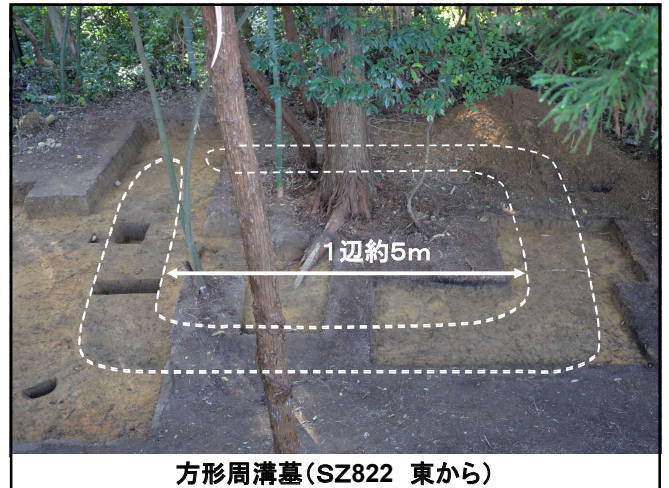
方形周溝墓(SZ743)の埋葬部1~4(東から)

スライド68



令和3年度の方角周溝墓(SZ743)の復元イメージイラスト

スライド69



方形周溝墓(SZ822 東から)

スライド70



スライド71

※白抜きは横穴系の埋葬施設・右数値は規模(m)

時期区分	時期	地域		阿賀北	信濃川河口付近	信濃川左岸 弥生・角田山麓	島崎川・ 西山丘陵周辺	新津丘陵 (古津八幡山)
		新潟シンボ編年	古墳集成編年					
弥生後期 (弥生終末期)	1							SK1005■3
	2							SK1004■6
	3							SZ743■10
	4							(SZ822■5)
	5							SK0354■15
	6				正FRC■5			
古墳時代前期	7	1期		二本松 塚山■16				
	8	2期		碓氷山■42	碓立八幡■30			
	9	3期						
	10	4期						
後半		5期		TQ232				

新潟県における弥生時代後期～古墳時代の主な墳墓

スライド72



スライド73



スライド74

### 国内の木槨墓一覧

(岡村幸作2018『古墳時代棺槨構造と系譜』同成社をもとに作成・一部追加)

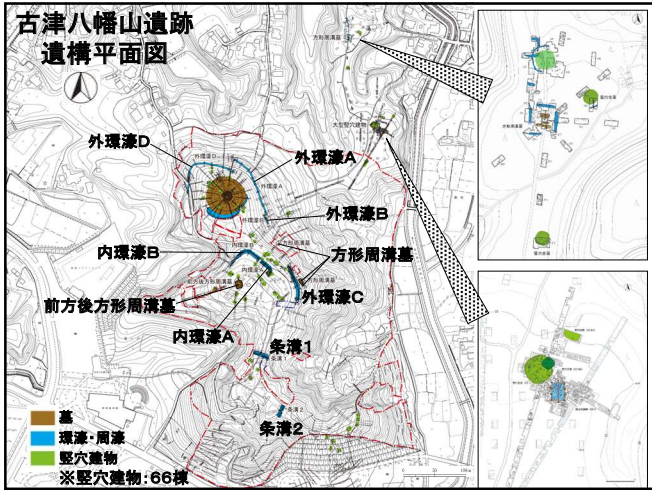
No.	遺跡・遺構	所在地	時期	形状	高さ		幅		長さ		埋葬部	木棺	備考
					全高	深さ	幅	幅	長さ	長さ			
					A	B	C	1	2	3			
1	鹿ヶ野古墳群1	奈良県北葛城郡	古生中期後葉	A	2.5	0.8	0.45-0.5	0.75	0.8	0.15-0.2	1.9	有	あり
2	神倉1号周溝墓	奈良県北葛城郡	古生中期後葉?	A	2	0.75	0.15	0.15	0.35	3.8	有	有	あり
3	神倉2号周溝墓	奈良県北葛城郡	古生中期後葉-中葉	A	0.45	1.25	—	—	—	—	—	有	なし
4	神倉3号周溝墓	奈良県北葛城郡	古生中期後葉	A	1.1	1.8	—	—	—	—	—	有	なし
5	神倉4号周溝墓	奈良県北葛城郡	古生中期後葉	A	2.8	1.5	—	—	—	—	—	有	なし
6	神倉5号周溝墓	奈良県北葛城郡	古生中期後葉	A	7.35	3.7	—	—	—	—	—	有	なし
7	神倉6号周溝墓	奈良県北葛城郡	古生中期後葉	A	2.45	0.95	0.55	—	—	—	—	有	なし
8	神倉7号周溝墓	奈良県北葛城郡	古生中期後葉	A	3.95	2.95	0.95	—	—	—	—	有	なし
9	古津八幡山遺跡(環濠)	奈良県北葛城郡	古生後葉-本葉	B	(5.0)	1.75	—	3	1.3	2.5	—	有	あり

スライド75

### 古津八幡山遺跡の動向

時代	北陸南西部編年	古墳集大成編年	新潟シンボジウム編年	古津八幡山遺跡			
				環濠	竪穴建物	掘立柱建物	墓
弥生時代中期	小松			—	—	—	—
	専光寺			—	—	—	—
	戸水口			—	—	—	—
	V-1群			—	—	—	—
弥生時代後期	V-1群			—	—	—	—
	V-2群			—	—	—	—
	V-3群			1期	集落の出現 外環濠の掘削	S1802-S1821 SI0603 SI03503 SI03505 SI0602 SI728	SX1005
	2-1群			2期	環濠が上層まで埋没 ⇒一部再掘削? 内環濠掘削?	SI03S06 SI03N03	SX1006 SX1004 SZ743 (大型方形周溝墓) SZ822
前期へ生古墳時代終末	2-2群			2期	—	掘立柱建物群?	SX1007
	3群			3期	—	—	—
	4群			4期	—	大型竪穴建物(SI1)	—
	5群			5期	—	竪穴住居(SI465)	—
古墳時代前期	6群			6期	—	—	—
	7群			7期	—	—	—
	8群			8期	—	—	—
	9群			9期	—	—	—
	10群			10期	—	—	—
	11群			11期	—	—	—

スライド76



スライド77



スライド78

おわり



## 新津の山に大きな遺跡と古墳があった！ —歴史を変えた古津八幡山遺跡—

坂井秀弥（新潟市歴史博物館館長・奈良大学名誉教授）

### 目次

はじめに

1. 遺跡発掘と戦後日本の考古学
2. 新潟にもあった古墳とその前史
3. 古津八幡山遺跡の発見
4. 保存の声と確認調査の継続
5. さいごに—遺跡の意義

### はじめに

ただいまご紹介いただきました、新潟市歴史博物館、通称みなとびあの坂井と申します。よろしく願いいたします。

（スライド1）今日は、「新津の山に大きな遺跡と古墳があった」というテーマでお話しさせていただければと思います。

この写真は古津八幡山遺跡（註）の史跡整備が終わったあとで撮影していると思いますが、非常にきれいでよくできています。これが遺跡のある丘の上で、ここに直径55mくらいの、新潟県で最大の古津八幡山古墳があります。

それからこちらに、ちょっとポツポツ見えるのが、竪穴住居を復元したところになります。ここにちょっと土手みたいなのが見えますが、これは集落、ムラを囲っている空堀で、環濠と言います。私はこの写真、すごくいい写真だなと思います。向こうを見ると角田山、弥彦山と手前に広い蒲原平野が見えます。秋の稲刈りが終わったあとでしょうか。恐らくこの辺、日本海の向こうに佐渡が見えるはずです。

手前のここに当時運動公園とか、呼んでいた公園計画がありました。ここが今の新

津美術館で、こちら側が県の植物園になります。1987年、私がまだ県の文化行政課の職員の際に、そもそも磐越自動車道という高速道路の計画があがりました。越後平野は低い土地ですから、高速道路は盛り土をして道路面を高くしてつくります。その土砂の確保が必要だということで、この山一帯から土を取って高速道路をつくるという計画で、その後公園にするというものでした。そのため私は、この計画地に遺跡があるかどうかの調査を現地で行うことになりました。私が現地に来たのは1週間だけでしたが、まったく存在がわからなかった大変貴重な古墳や遺跡があることがわかりまして、いろいろな問題があり、紆余曲折もありました。しかし、1990年に遺跡を保存することが決まり、それから15年経った2005年、平成17年に国の史跡に指定されました。

国の史跡というのは、現在全国で1,900カ所くらいあります。新潟県では35件くらいです。学術的な価値が高くて、国としてもきちんと残していくことを決めた遺跡です。国史跡は、発掘調査や史跡公園の整備事業に、国が補助金を出すことになっていて、それだけ大変重要な遺跡です。

（スライド2）この新津美術館はなかなかきれいな建物で、私は好きです。その隣にあるのが県立植物園です。そしてこの美術館の奥のほうにあるのが、新潟県の埋蔵文化財センター、遺跡のことを取り扱っている施設になります。ここにも書いてありますけれども、1987年10月、私はこの地

に初めて立ちました。それは遺跡があるかないかを確認するための調査に来たものです。思いもよらず見つかったのが、県内最大の大きな古墳と、山の上にある、特殊な弥生の高地性集落でした。新潟県でこんなものが見つかると思っていませんでしたので、大騒ぎになりました。しかし、多くの方々の理解や協力が得られまして、特に、旧新津市の地元の方々、それから県をあげて保存運動が起こりまして、遺跡は保存され、先ほど申し上げたように2005年に国の史跡に指定されました。

今は、先ほど写真で見てもらったように大変きれいな遺跡公園になっています。それから周辺に、このような美術館や植物園があって、歴史、文化と自然豊かなゾーンとして多くの市民の方々に親しまれています。35年前、よもやこのように多くの方々に親しまれる場所になるとは、私はまったく想像できなかったところです。

私は27年間新潟を離れていましたけれども、3年前新潟に戻ってまいりまして、それからこの新津美術館にも来るようになりました。去年の12月、黒井健さんの展示があったときに見に来ました。この美術館は入口から入った正面がきれいですよね。白い大理石の大きな階段があります。その奥にカフェがありますが、そこでコーヒーを飲みながら、向こうの山を眺めて、「35年前は大変だったな、でも今はこんなふうに素敵な美術館もできて、市民に親しまれる場になってよかった」、とつくづく思ったところです。

今日は、遺跡の発見に立ち会った者として、当時を振り返って、遺跡の意義を考えたいと思います。私としては35年前いろんな方にお世話になりましたが、その関係者の方々に感謝を申し上げたいという思いです。

これからの話は大きく5つに分かれてい

まして、「遺跡発掘と戦後日本の考古学」、それから2つ目が、「新潟にもあった古墳とその前史」、3つ目が「古津八幡山遺跡の発見」、4つ目が「保存の声と確認調査の継続」、そして5つ目が「さいごに」ということで「遺跡の意義」ということでまとめてみたいと思います。

## 1. 遺跡発掘と戦後日本の考古学

### 発掘調査と歴史の解明

(スライド3) まず、「遺跡発掘と戦後日本の考古学」です。日本は戦後、特にこの半世紀、もう本当に日本列島各地で発掘調査をしてきました。ちょうど去年で発見50年になった高松塚古墳の壁画が見つかって、日本に考古学ブームがやってきました。そのあと、全国的に大規模な開発事業にともなうかなり発掘調査が行われ、その過程でさまざまな遺跡が見つかりました。九州の佐賀県では、吉野ヶ里遺跡という弥生時代の遺跡が見つかって、弥生時代のクニといっているものの全貌がわかりまして、工業団地の建設はやめになって保存されました。

それから数年後、今度は東北、青森県で、県の運動公園の建設工事前に発掘調査をしましたら、三内丸山遺跡という、縄文時代のすごい遺跡が見つかりました。縄文時代は弥生時代の前の時代で、稲作をやってない、日本人のイメージとしては、貧しい文化のようなことを考えていたのが、まったくそうではない。人口も多かった。そんなことがわかりまして、青森県は事業をやめて遺跡を保存しました。これが2年前に世界遺産に登録されたということになります。

(スライド4) 各地で遺跡の発掘調査が進められる中で、歴史が明らかになっていきました。4年前に大阪の百舌鳥・古市古墳群が世界遺産になり、それから今申し上

げたように、東北と北海道の縄文の遺跡が、世界遺産に登録されました。このような遺跡が世界遺産になるなんてことはまったく思ってもいませんでした。多くの遺跡が発掘されて、考古学の研究も進んで、世界遺産の登録に至るということは、戦後日本各地で一生懸命発掘調査を続けてきた成果が実ったということではないかと、私は思います。

(スライド5) この東北・北海道の縄文遺跡の世界遺産は、17の遺跡が登録されていますが、そのうちの半分くらいが、工事前に発掘調査をした結果、すごい遺跡だということがわかって、工事を取りやめて保存した遺跡です。写真にあるように地元の市民の方々が、縄文の遺跡を見直して地域づくりにつなげていることも大変注目されます。

(スライド6) こうした戦後日本の遺跡の発掘調査が数多く実施されたことは、文化財の保護制度と実は密接にかかわっています。今の文化財保護法は、土木工事で遺跡が影響を受けるときは、事前に発掘調査を行うという規則になっています。ですから、年間全国で8,000件くらいの発掘調査が行われています。発掘調査は誰がやっているかということ、おもに大学の先生がやっているわけではなくて、都道府県・市町村の行政が発掘調査をしています。ですから、全国の都道府県・市町村には、考古学・文化財の担当者が5,500人くらいいて、発掘調査や考古学の調査研究を行っています。

こうした発掘調査は土木工事に伴う調査ですから、必ずしも学術的な目的でやっているわけではありません。ある考古学的な問題の解明のために発掘するわけではなく、ここの遺跡が工事で壊れるからとりあえず発掘調査をしておくという考え方です。ただし、学術的な手続きを踏んでやっていますから、きちんとした調査をやります。そ

の結果、確かに地域的な粗密の差、たくさん調査している所とそうでない所の差はありますが、全国各地で悉皆的な発掘調査を続けてきました。その結果、各地域と国の成り立ちが本当にここまでわかってきたなど、私はこの半世紀を振り返って思っています。新潟県もその例外ではないわけです。このような発掘調査の仕組みができた、その出発点は昭和20年の敗戦にありました。このことはとても大事です。

#### 敗戦と登呂遺跡の発掘調査

(スライド7) 戦後の日本に夢と希望を与えた遺跡として有名なのが、静岡県の登呂遺跡です。これは当時の発掘調査の様子の写真です。静岡市の駅南側の水田地帯でこういった農具がたくさん出ましたから、間違いなく稲作をやっていた。2,000年くらい前の弥生時代の遺跡です。この発掘調査は昭和22年から3年間行われました。その成果が全国各地に、ラジオとか新聞で伝えられたわけです。

(スライド8) 登呂遺跡の発掘調査は日本全国の名だたる考古学者が結集して行われました。これは現地にある登呂博物館の展示写真です。地元の中学生、高校生も手伝ったり、国会から資金難に500万円が送られたり、当時の500万円だからすごい金額です。それと食糧難の中で米が送られたりしました。この発掘調査を契機に日本の考古学で一番の学会である「日本考古学協会」が設立されました。

(スライド9) このような登呂遺跡の話は、私が文化庁へ行ってから、去年亡くなられた明治大学の塚本初重先生からよく聞きました。塚本先生は、戦時中出征しておられまして、命を何度も落としかけたそうです。しかし、日本が敗戦になって、戦前の歴史がいかに間違っていたかということを感じ、登呂遺跡の発掘調査に参加して、そこから自分の考古学の発掘人

生が始まったと言っておられます。大塚先生の書いた本のタイトルは面白いです。『土の中に日本があった』です。土に埋もれた遺跡の中から掘り出された歴史が、真の日本の歴史だったということを言われているんです。それほど登呂遺跡の発掘は大きなインパクトを与えたと言えます。

(スライド 10) それから間もなく調査されたのが岩宿遺跡です。日本に1万年以上前の旧石器時代の遺跡は、当時はないと言われていたのが見つかりました。日本にも古い人間の歴史があったということも大きな追い風になりました。

(スライド 11) 1950年、その前の年に火災で焼けたのが、奈良にある法隆寺です。いまでは世界遺産に登録されている世界最古の木造建造物ですが、当時こんなふうには焼けてしまいました。これを教訓に、文化財を大事にするために法律を整備しなければ駄目だということでつくられたのが今の文化財保護法です。このときに、初めて埋蔵文化財、遺跡についての規定ができました。どういう規定だったかということ、発掘調査をするときは、届け出を出しなさいという規則です。何でそういうふうになったかということ、大変面白いんです。登呂遺跡の影響で、全国各地で遺跡の発掘が大変盛んになりました。そうすると、すべての遺跡で専門家が調査しているわけではないので、ちょっと学術的に問題のある調査もあったわけです。それで、発掘調査するときは事前に国に届け出を出してください、それで発掘調査をする人が的確かどうか見ますよ、ということになったのです。

こういう状況を見ると、戦後、国民は自分の地元にある遺跡を掘ろうとしたということが各地で見られたわけです。それだけ遺跡に思いを寄せたということなんです。国や地域の成り立ちを知りたいと願って、各地で埋もれた遺跡に真の歴史を求めたと。

だから、発掘調査を行うことに対して、国民の理解と協力が得られてここまで多くの発掘調査が行われてきたということだろうと思います。私は数年前まで、埋蔵文化財と言われる遺跡の発掘調査が日本で一生懸命されてきたのは、考古学に関わっている人たちが一生懸命やってきたからだとか、考古学という学問が魅力的だからとか、そのような理由だと思っていましたが、そうではないんです。多くの国民の皆さんが、遺跡って素晴らしい、そこに真の歴史があると考えたからなんだ、ということだと思います。

### 市民運動と遺跡保存

(スライド 12) 日本の文化財保護の大きな特徴の1つですが、遺跡を市民が守ってきたということがあります。これは戦後の昭和30年、1955年に古墳が壊されるのが大問題になった大阪府堺市のイタスケ古墳という古墳です。古墳はこんもりと土を積んでいますから、その土を工事に使うために削ることになったんです。それに対して古墳をつぶすなという市民運動が起こりました。結局古墳は保存されて国の史跡に指定されました。これで見ると、本当に遺跡を保護してきたのは、考古学の研究者ではなくて、市民の方々です。奈良の有名な平城宮跡という特別史跡、奈良時代の宮殿の跡ですが、それを確認したのは、建築史の関野貞という学者ですが、この遺跡を守ろうと立ち上がったのは、地元の植木職人の棚田嘉十郎という人です。今ああやって保存されているのは、市民の方々が声をあげたからです。

その市民の方々が団体をつくって、新潟大学におられた甘粕健先生が中心になってずっと進めてこられたのが、この文化財保存全国協議会という団体で、何年か前に70年の歴史を迎えたということになります。

このように遺跡を保護する制度があった

ので、1987年、今から35年前、ここの開発計画があがったときに、調査をしなければならないということになったんです。考古学者が、ここに遺跡があるから何とかしなければならないといって声をあげたのではなく、そういう法律の制度があったからなんです。ここが大事です。

## 2. 新潟にもあった古墳とその前史

(スライド13) 1987年に、古津八幡山遺跡の発掘調査がされる前の話をしておきます。私は1980年、昭和55年に大学を終えて、新潟に戻ってきて、新潟県の文化行政課に就職しました。発掘調査の仕事があったからですが、その当時、新潟県で古墳というと、誰もが知っていたのがこの菖蒲塚古墳です。当時、新潟市にまだ合併される前の巻町でした。これは真上から撮った写真ですが、墓地ですね。墓地ですが、ここに何となくこういう輪郭が見えませんか。柄鏡形というか、鍵穴形、ここが丸くなっていて、ここが四角くのびています。これは、全長が約55mある新潟県で前方後円墳としては最大の古墳です。これはすでに国の史跡に指定されていました。ここから出土したのがこの鼈鏡という県の指定文化財になっている大変いい鏡です。ただ、新潟県では甘粕先生が新潟に赴任する以前の古墳研究はさほど進んでおらず、この菖蒲塚古墳は、古墳時代でも前期・中期・後期という3つに分けると前期の古墳なのですが、前期ではなくて中期、5世紀くらいじゃないかというような評価もあったくらいです。この鏡についてもさほど重要性が指摘されていなかったのですが、大変素晴らしい鏡です。

### 1) 山谷古墳の発見

(スライド14) 私が新潟に戻った1980年

の翌年、実は大きな古墳の発見がありました。巻町の山谷古墳です。1981年11月25日、もうしぐれ気味の季節です。発見のきっかけは、新潟県教育委員会による角田丘陵の分布調査です。当時はまだ巻原発の話があったときで、文化行政課の係長の金子拓男先生から、東北電力がああ辺に鉄塔つくるから、その鉄塔をつくる場所に遺跡があると困るから見てこいと指示されました。そこで現地に行ったのが私と、私と同年齢の高橋保さんです。金子先生は「最近、山陰とか北近畿、丹後のほうで、弥生時代の台状墓、丘の上に四角いマウンド、墳丘を持っている墓が見つかるし、古墳もあるかもしれないから、よく見てこい」と言われました。雨の中、山をずっとあちこち歩きながら、午前中に「これは古墳だな」と思ったのが、岩室村の観音山古墳でした。直径20mくらいの円墳でした。やはり古墳があるじゃないかと。

(スライド15) スライド左側が後に新潟大学が測量した山谷古墳の図面です。当日の午後、暗くなりかけたときに山谷古墳の所へ行ったら、前方部がこっち側、後方部が向こう側ですが、前方後方墳、両方とも四角のきれいな墳丘が見えました。最初は前方後円墳かなと思ったが、よく見ると両方四角だから前方後方墳でした。こんな古墳があるなんて聞いたことがないですから、本当に大変なことだなとワクワクしました。ちょうどその日が私の長女が生まれた日で、朝、妻が陣痛で入院するということで、ちょっと心配しながら山を歩いていたのですが、前方後方墳が見つかり興奮いたしました。

ところが、あとあとよく調べると、実は1959年に巻の藤田治雄さんという方がすでにその古墳を発見していたんです。だから私は再発見だったのです。じゃあ何で古墳と認められなかったのかということ、当時

の行政、新潟県教育委員会で、これを中世の山城だということで処理されていたようなんです。ところが間違いなく古墳で、右の写真は後に新潟大学、甘粕先生が発掘調査した際のもので、ちょうど後方部のど真ん中に大きい埋葬施設があつて、ここに木棺を入れた痕跡がこうあります。人が写っていますから、かなり大きな埋葬施設であつたことが分かります。

(スライド 16) 右の写真は、古墳の周り、墳丘の裾辺りから出てきた土器です。二重口縁の壺といひまして、古墳に副葬する土器です。時期は古墳時代前期で、同じく前期の菖蒲塚古墳よりも古い古墳だということも、この土器の研究からわかりました。4世紀の初めとかそのくらいまでいくのではないかと思いますが、その辺はこれからの研究でもあります。

巻で古墳が見つかって新潟大学が調査していた際、今度は三条市の方が、うちの裏山にも古墳のようなものがあると甘粕先生に言ってこられました。そこで現地に行ったら前方後円墳が見つかって、保内三王山古墳群という名前になり、1985年、昭和60年と翌年に発掘調査が行われたということです。

(スライド 17) 山の上だけじゃなくて今の新潟市の西区、旧黒埼町の緒立八幡宮という神社の境内で、古墳らしきものが以前から見ついていたんですが、1981年、國學院大学の吉田恵二先生が発掘調査を担当されまして、これもやはりどう見ても古墳だということになりました。写真を見てみると、墳丘のマウンドの表面に葺石をきれいに並べています。図面をとるとこんなふうになりまして、低いほうに一行に石を並べ、それを区切るようにまた石を並べて、その間に石を充てんする、正式な古墳の葺石のふき方です。これも古墳時代前期のもので、新潟平野にはいくつか古墳があると

ということが明らかになりました。

(スライド 18) 私がこの古津八幡山の調査に来る 1987年のころにはいくつかの古墳が見つかっていました。まず、黒埼の緒立八幡神社古墳(6)です。それから角田山から弥彦山にかけての山麓には、菖蒲塚古墳(9)、山谷古墳(10)、それから観音山古墳(11)、それから弥彦村にある稲場塚古墳(12)と、いくつかあるということがわかりました。それから新津から三条にかけて、新津の八幡山古墳(1)、小須戸の矢代田円塚古墳(2)、田上町のウワノエゾ塚古墳(3)、加茂市の福島古墳(4)、三条の保内三王山古墳群(5)、こういった古墳がずっと並んでいまして、実は新潟には多くの古墳があるということがわかってきていました。

## 2) 弥生・古墳の土器編年

(スライド 19) 弥生時代から古墳時代の土器の研究も少しずつ進められました。これは、私が新潟に戻ってから初めてこの時代の土器を年代順に分類した編年図になります。実はこういう土器の研究も、私が自主的にやったわけじゃなくて、当時係長だった金子拓男先生が、新潟県内の弥生から古墳時代の土器をきちんと整理して研究しなければ駄目だと認識しておられました。お前は関西で考古学をやってきたのだから新潟の土器をやるように指示されまして、やった最初の仕事がこれです。大体、弥生時代後期の終わりくらい土器、そして弥生時代から古墳時代へのちょうど端境期の土器、それから古墳時代前期の土器、ということで3つくらいに分けました。

私は大学では新潟のことをまったく知らずに新潟に戻りましたので、新潟の土器を見て最初に驚いたというか、大変感激したことがあります。なにかというと、高杯というお皿に脚がついている土器ですが、この形を見ると、私が関西で見ていた土器の

形とそっくりなんです。赤線で囲まれているのが、奈良県で出た弥生時代後期の高杯の図面です。左側が少し古くて右側が新しいものです。杯部という上のお皿の部分が、上に行くと反り返ります。時期が新しくなると反り返りが大きくなって、この口縁部が長くなるという変化があります。そう見ると、この新潟の高杯も同じ形に変化していることがわかります。関西と新潟は500キロも離れていてまったく無関係のように見えるけれど、そうではなく、やはり連続していて、歴史は関連していることがよくわかりました。

(スライド20) 2年後、もう一度『新潟県史研究』に弥生時代後期の土器についてちょっと書きました。そこでまず第1点として指摘したのは、現在知られている後期の土器のうち、新潟市の六地山遺跡の土器は相対的に古いと。弥生後期の前半から中頃にいく。それ以外はもうちょっと新しい後期の後半以降の土器だということです。

それから、新潟の甕を見ていると、面白いことがわかりました。有段・擬凹線、ちょっと難しい名前ですが、有段というのは、この口のところが一回ここで止まって、段があってもう一回立ち上がっていくこと。擬凹線というのは、この口のところに横方向のしま模様がついています。これを擬凹線といいます。北陸地方の中心は石川県とか福井県とかになりますが、そちらのほうにいきますと、この手の土器がたくさんありますが、どうも新潟には少なく、こっちの単純なシンプルな形の土器のほうが多いということがわかりました。

それで、新潟の弥生後期から次の時期にかけての地域色がどんなふうに見えるか。弥生後期後半に形成される北陸地方の地域圏の中で、阿賀野川以北を除く越後は、越中、能登、佐渡と同じように、北陸を東西に大きく分けたときに東側の地域色に入

るということを言いました。そういう地域色は古墳時代になっても続くことがわかっていました。

(スライド21) こういう研究が土台になっていって、その後私が新潟に赴任した5年後に、一時期新潟大学の助手を務めていた川村浩司さんが、九州大学の大学院を卒業し新潟県に就職されて、私と一緒にこの時代の土器をやりました。1993年に、新潟大学で日本考古学協会の学会が開催された際、川村さんが主導して、東日本の土器の編年をやりました。編年というのは、土器の特徴を年代順に調べ、並べていく作業ですが、川村さんの研究が今の東日本の中心になっています。川村さんはその後若くして亡くなりまして、本当に残念ですけども、川村さんがやったこの研究成果が今も生きているということです。

こうやって並べますと、古津八幡山の時期はこの一番上の時期です。これよりももうちょっと前くらい。庄内というのはちょうど古墳と弥生時代の端境期で、この布留0と書いてある、ここからが古墳時代のちょうど初頭に入ります。少し人によって言い方が違うので微妙ですが、ともかくさまざまな研究が続けられてきました。

### 3) 高地性集落の存在

(スライド22) もう1つ、私が新潟に来て驚いたのは、高地性集落というものが新潟にもあるということです。高い土地、丘とか山の上にある弥生時代の集落のことを高地性集落と言います。私は関西で考古学の勉強をしましたから、関西ではあちこちにあります。弥生時代中期から後期にはよくみられる遺跡ですが、新潟に正真正銘、西日本と同じような高地性集落があるということに驚きました。現在の妙高市(合併前:新井市)に斐太遺跡ひたという遺跡がありますが、この遺跡は以前から大変有名でし

た。位置としては、JR 信越線で直江津から長野に抜ける鉄道、新井を越えて脇野田を越えて、ちょっと長野よりに行った山の上にあります。ふもとの平地との標高差が 60 m から 70 m くらいあります。緑色に塗ってある所が遺跡の範囲でして、赤いドットで示しているのが竪穴住居のある場所です。全体を発掘調査しているわけではないのですが竪穴住居がどこにあるかがわかります。普通は発掘しないと竪穴住居がどこにあるかわかりません。何でわかるのか。この遺跡は豪雪地帯にありますから、北海道もそのようなのですが、冬季に雪で覆われる期間は、竪穴住居跡のくぼみに土砂があまり流入しません。その期間が長いので自然のままでは完全に埋まらないんです。ですから現地に行くと、竪穴のくぼみがはっきりと残っています。それから、地図上に黒い線が引いてありますが、これは環濠という大きな堀です。こういう遺跡が弥生時代後期の新潟にあります。なぜこういった遺跡があるのかということですが、弥生時代後期に西日本から北陸にかけて、倭国大乱といった戦乱があったと。それに備えるために高い山にムラをつくった、そういう遺跡があると考えられています。

(スライド 23) 環濠というのはムラを防御するための施設です。V 字の大きな深い堀をムラの周りにめぐらします。そうすると簡単にムラの中に入ってこられないということです。これは新津の古津八幡山遺跡の環濠ですが、このように人がすっぽり入ってしまうんです。これは 2 m のポールです。

(スライド 24) こういう環濠を持つ、高い山にある高地性集落が西日本にはよくあります。例えばこれは瀬戸内、香川県にある日本の考古学史上大変有名な高地性集落で、紫雲出山遺跡と読みます。標高差 300 m くらいのすごく高い山のでっぺんに遺跡が

あることで有名ですが、こういう遺跡が新潟にもあることにおどろきました。

(スライド 25) これは新潟県の地図ですが、斐太遺跡というのはここです。頸城の、これは関川という川で、長野に抜けるちょうど北陸と信州との境目の所につくられているのが斐太遺跡という高地性集落です。これはやはり北陸と信州との集団間の何かがあるのでしょうか。純粋に戦いのためではなくとも、物資を確実に流通させるため、あるいは安全に人が移動させるためとか、人の移動などの知らせをすとかというようなことで使われることも考えられます。こうした高地性集落がこちらの蒲原平野にも実はあるということがわかりました。

(スライド 26) 見附市の大平城遺跡は、私が新潟県へ就職したときにはすでに工事が終わっており、全然残っていませんでした。これは報告書に載っている図面です。これも北陸自動車道の高速道路の土取りで実は全部もう削平されたのですが、堀があって、当時の新潟県では大平城跡、城跡として調査され、報告されています。ところが、遺跡からは弥生時代後期の土器しか出ていません。それでこういった深い堀をめぐらしてるということですので、これも高地性集落で、環濠を持つ集落であるということがわかりました。

### 3. 古津八幡山遺跡の発見(1987 年: 第 1 次調査)

#### 調査対象地と確認されていた遺跡

(スライド 27) 私が 1987 年、新津の古津八幡山の調査に来るまでの間は、このように弥生時代後期から古墳時代の研究をしていました。研究といっても大した内容ではありませんが。そこに持ち上がったのが、磐越自動車道建設に伴う盛り土のための土砂採取です。この辺一帯全部丘だったので



すが、全部削り取ると。そこで事前に調査を行うことになりました。当時の遺跡地図を見るといくつかの遺跡がすでに確認されていました。鳥撃場遺跡という縄文時代の遺跡、それから埋葬地遺跡という縄文時代の遺跡。ここ3年くらい新潟市が発掘調査をして、大型の竪穴建物が見つかったり、方形周溝墓という大きなお墓が見つかったりという話があり、評価が変わりました。すでに新潟市文化財センターの相田さんからお聞きしていると思いますが、それらが見つかったのがもともと縄文時代の遺跡だった埋葬地遺跡の周辺です。また、古墳が見つかった場所は、八幡山城跡という中世・戦国時代の城があるというふうに考えられていました。それから居村製鉄遺跡といって、奈良時代から平安時代にかけての製鉄、鉄をつくっていた遺跡があるというふうに台帳にちゃんと記載されていました。ですので、これらがどんな遺跡なのか、これ以外に遺跡がないのかということ进行调查目的でした。

調査期間は9月28日から10月9日の2週間でした。そのうちの、最初の週は私の先輩の戸根与八郎さんが担当して、私は2週間目に交代で来ました。そのとき私は、上司の寺崎さん、新潟県考古学会の会長を務められて、この前交代されてお辞めになりましたが、寺崎さんから「ここは中世の城があると言われていたけれども、これが本当に城跡か。古墳かもしれないし、高地性集落も新潟にあるから、十分よく見てくるように」というふうに指示を受けました。その結果見つかったのが、大型の円墳とか弥生時代の集落とか、それからあまり話題にならないのですが、古代の製鉄遺跡もたくさん見つかりました。

(スライド28) 当時の地図はこんな地図でした。線が引かれている範囲、谷を1つ挟んでふたつに分かれた、この線引きした

範囲の土を取るということになっていました。現在、新津美術館がこの谷の入り口にあります。谷奥に入っていきますと、新潟県の埋蔵文化財センターがこの辺にある。この谷の奥は金津という集落がある谷になっているので、あそこまでは全部土取りをしない予定でした。ここが今の植物園の場所です。八幡山城跡はこのBという所、Aは埋葬地遺跡、最近大きな方形周溝墓が見つかった場所、それからここは鳥撃場遺跡とか居村製鉄跡がありました。

これはふもとのほうから見た写真ですが(スライド28左上)、標高差50mくらいの緩やかな低い丘のてっぺんが、八幡山城跡があるという場所です。それで発掘調査したら、これがぜんぶ古津八幡山遺跡という弥生時代の遺跡になりました。これは当時私が平板という測量器具を使ってつくった図で、古墳とわかったものです(スライド28左下)。ここに書いてありますように、当時、大気観測所が置かれていました。どうも八幡山と呼ばれていたのは、観測所がつくられる前はここに八幡神社があったためのようです。また、観測所の周辺は段切りがされていて、段々畑となっていたのが何となくわかりました。

(スライド29) 今の地図と見比べると、ここに谷が入っていて、ここに美術館があります。弥生の丘展示館はここにありまして、植木屋さん、フラワーランドがここになります。ここに古津八幡山古墳と書いてありますが、城跡と言われていたところです。ここが埋葬地遺跡で、ここはまったく遺跡がわからなかった所です。何度も言いますが、こちら側半分、あまり話題にのぼらないのですが、ここにはすごい量の製鉄遺跡がありました。

**城跡は大型円墳だった！**

(スライド30) まず城跡があった場所ですが、現地へ行って変だと思いました。こ

んな輪郭の堀がある。中世の戦国時代の山城の堀は大体真っすぐです。なのに、これは弧状で円を描くような平面形です。そしてでかいんです。すごく深いです。私が行ったときにすでにトレンチがいくつか入ってまして、これはそのトレンチの断面ですが、一番下に黒い土が入っていて、上に黄色い土がきれいに積まれている。下をよく見ると縄目の土器が出てくるんです。これは変だな、縄文時代の遺跡があるのかなと最初はとっさに思いましたが、よく見ると弥生時代後期の天王山式という東北地方の特徴を持った土器でした。そういう目で見えていくと、この網目がかかっているところは、弥生時代の土、地層が残っていると。断面を書くとこうなるんです(スライド 30 左下)。そうすると、この上に載っているきれいな土は、どうも周辺から土を集めて盛った盛り土、人工的に盛った土だというのがわかりました。

10月5日、最初の日来たときから変だ、変だと思って、断面とかいろいろ見ている、八幡山はどうも大円墳じゃないかと思いました。私は大学3年のときから50年近く吉川弘文館の歴史手帳という黒い手帳を持っていて、毎日何があったかを書いているのですが、その当時の手帳を見ましたら、その日のメモには「大円墳か？」と書いてあります。その後3日間は、山じゅう製鉄遺跡を探し回っていました。私は漆に弱くてかぶれるので、1週間終わってから皮膚科に行きました。そのことも書かれていました。もう顔中真っ赤になりました。学生時代から漆にかぶれることはわかっていたので、今でも漆の木はすぐに見分けがつかず。だからいつもは除けるのですが、山の中で遺跡を探すのにそんなに除けてられないですよ。結局、顔中真っ赤になりました。

5日目、最終的にこの盛り土を平板で実

測すると、まるい形になって、コンパスで直径50mくらいの円を書くと、ちょうどその円の中に収まる範囲にあることが分かりました。直線的な地形はしているのですが、やはりこれは古墳なのだろうと。ちょっと足が震えるというか、そんな感じがしました。

(スライド 31) この辺は1m50cmくらいの大きな段差があって、トレンチを入れると下に黒い土が出てくる。こんな状態ですね。

(スライド 32) それで中世の山城の堀跡と言われたところを、地元から来てもらった方々に1m幅でずっと掘ってもらいました。

(スライド 33) そしたら1つは、これわかりますか。よく見てください。黄色っぽい土です。こっちはちょっと黒っぽい土です。考古学で、何でそこに竪穴住居跡があったかわかるかというのは、土の色を見て、土の違いで見分ける。ここで、明らかにこっちは黄色いきれいな土が、境目がこう落ちるんですね。ここは平らになって黄色い土になる。私たちは人の手が加えられていない土を地山じやまといいます。段差が30cm以上ある窪みに黒い土が入っていて、ここにちょっと明るい土が入っています。これは竪穴住居が埋まっていく過程で、土が流入していった跡だということがわかりました。古墳の下には竪穴住居が埋もれていると。

(スライド 34) そしてその古い地層の上には、こういうきれいな周りの土を積んだ盛り土があって、これは古墳の盛り土だと。ずっと下へたどっていくと盛り土がなくなるんですが、これは堀の中ですね。上のほうはこんなふうきれいな盛り土がありません。だから人工的に土を盛った古墳だということがわかりました。これは調査量としては比較的楽でした。大変だったのは、何度も言いますが製鉄の遺跡です。

## 広がる製鉄遺跡の確認

(スライド 35) 45 ヘクターも山の  
中、どこに製鉄の遺跡があるかを調べるの  
は、木が生えていますから至難の業です。  
ところがここは、柿団地がすでに造成され  
ていて、平坦地をつくるのに山を削った斜  
面が結構あちこちにあったんです。そこを  
ジョレンという道具で作業員さんたちに土  
を削ってもらいました。そうしたら、この  
ように真っ赤に焼けた土が見えてきました。  
ここもそうです。こちらは何もない地山で、  
ここに赤くて炭が少し入っているような土  
が見えるんです。これは炭窯の断面です。  
こちらは調査期間中、新津市の文化財審議  
委員をされていた田村賢雄さんです。小川  
重蔵さんなど、考古学の専門家の方たちも  
応援に来てくれました。こうやって探しま  
した。

(スライド 36) これは本調査をしたとき  
の製鉄の遺構です。ここに製鉄炉という西  
洋風呂みたいな形をした、長さ2mくらい、  
高さ70~80cmの炉があります。製鉄は、炉  
の中に砂鉄と炭を投入して、温度を上げて  
砂鉄から不純物を取り除いていくのですが、  
それには大量の炭がいります。そのために、  
製鉄遺跡では必ず周辺に炭窯をたくさんつ  
くります。ここに黒い溝が見えますが、こ  
れが炭窯です。1基、2基、3基と。製鉄  
炉が1つあれば、最低3つか4つ炭窯があ  
るということになります。

(スライド 37) 製鉄炉は上から見るとこ  
んな形をしています。

(スライド 38) 福島県で製鉄実験を行っ  
ていて、これが炉を復元したものです。西  
洋風呂みたいな形をした炉の中で、炭と砂  
鉄を入れて高温にして不純物を取り除くの  
です。この人たちが何をやっているかとい  
うと、炉の中を高温に上げるためにフィゴ  
という道具を使って風を送っているんです。  
この炉の下にフィゴの送風管がついていま

して、ここをシーソーのようにして踏むと  
風が炉の中に送られて高温になるという仕  
組みです。この作業を2昼夜くらいやりま  
す。炉の中を見ると赤々と燃えていますね。  
今でも、こういうような古い方法で日本刀  
の材料をつくることを島根県ではやってい  
ます。

## 第1次調査のまとめ

(スライド 39) 私は調査に1週間しか参  
加しませんでした。都合2週間の調査が  
終わりました。簡単な報告を作りました。そ  
のときに私はまとめにこう書きました。1  
つ目は八幡山城跡で、これについては堀と  
盛り土の形状・構造から中世の山城とは考  
えられず、古墳時代の円墳と見るのが妥当  
と考えられると書きました。仮称八幡山古  
墳という名前をつけて、古墳であるとしま  
した。いくつか説明を加えたあと、直径55  
m以上の円墳とすれば県内最大であると。  
このあと新潟大学が1991年に測量調査を  
して、間違いなく直径55mもある大円墳だ  
ということが証明されました。

2つ目は、古墳造営前にはこの丘陵尾根  
上に弥生時代中期から後期の集落跡が存在  
する、仮称八幡山遺跡としました。これは、  
これまでまったくわからなかった遺跡です。  
遺跡の広がりはこのときの調査では確認で  
きなかつたわけですが、尾根のピークまで  
延びていたことは確認されたと書いていま  
す。古墳があった場所よりもさらに南側に  
高いピークがあって、そこまで延びている  
ということは確認したのですが、広がりが  
まったくわかりませんので、あとできちん  
と詳細な調査をする必要がある、と書きま  
した。土器は東北地方南部に分布する天王  
山式土器で、県内では数少ない例だと。な  
お、丘陵尾根上に立地することから、一般  
的な農村ではなく特殊な性格を持つものと  
考えられると。高地性集落とは書きません  
でしたが、高地性集落であることは明らか

であったので、普通の低地にある農村ではなくて、特殊な性格を持つと書きました。弥生時代の集落、古代の製鉄遺跡は分布・確認調査が不十分なので、さらに詳細な調査を要する、というふうに結びまして2週間の調査を終えました。

考古学をやっていますとこういう場面にたまに遭遇するのですが、すごいものを見つけていますからやはり胸が躍るんですね。ただ、この場所は土取り工事をすることで調査をしていますから、土取り工事をされたら遺跡が壊れるわけです。本当に壊れていいのかと、気持ちが行ったり来たりしながら、やはりすっきりしないまま調査を終えたということです。

私が参加した1週間の成果をお話しましたが、これからが本当にいろいろと大変でした。今回この資料をつくりながら、いろんなことがあったな、と思い返しましたが、結果的にある程度遺跡を残せて、今現在、冒頭で申し上げたような素晴らしい場所になったということで、私はすごくよかったです。

1987年の10月に調査が終わり、そのあとから、地元の方々、新津市の文化財審議委員の方々も調査に参加されまして、すごい遺跡が見つかったということがわかってきました。それから、調査をやっているときも、これはすごい古墳ですということを新津市の方にも申し上げました。当時、社会教育課の課長さん、のちに市長になられた湯田さんに、これだけの古墳はもうつぶせませんよ、と私は申し上げました。脅すようなことだったかもしれませんが、そんなことを言った記憶があります。

#### 4. 保存の声と確認調査の継続

##### 1) 講演会「新古今集」1988,2

(スライド 40) 調査から1、2か月くら

いしたあとに、新津市青年会議所の片岡さんが、私が仕事をしている内野にあった県の曾和分室という所を訪ねてこられました。片岡さんは、大変な遺跡が出たと聞きました。そういった遺跡は新津にとっても大事だと思います。だから、何とか保存して今後のまちづくりに生かしたいと。私にとってはすごく新鮮でした。市民の方がそのように遺跡に対して期待を投げかけてきた。それに対して私は、こういう遺跡の保存問題については、新潟大学に甘粕先生という全国的によく知られた先生がいますから、甘粕先生の所に相談に行ったらいいですよ、とお伝えしたら、甘粕先生の所に行かれたんです。片岡さんはこの成果を市民の方に伝えたいと言われまして、翌年の2月11日、建国記念日に講演会を開催することになったわけです。この右側は、私が当日用意したレジュメの原稿です。黄色くなっているのはそのせいですが、ここに新津市民会館と書いてありますね。新津市古津、そして地元の方は読めると思います、蒲ヶ沢(ガワソ)遺跡群の調査、ガワソと地元の方は言われていました。私が調査成果を報告して、それからその遺跡の意義について新潟大学の甘粕先生が講演するという、2本立ての講演会でした。そのタイトルが、「新津の古代に思いをはせて」ということで、この集いが「新古今集」、新津の古代と今を考える集い、新古今集、これはなかなかいい言葉だなと思いました。古代と今、考古学をやっていると古代のことを考えますが、今のことを必ずしも結びつけて考えないのですが、古代と今を考える。これは昔の古い遺跡を新津のまちに残して保存して役立てたいと、そういう思いがあるということ。このタイトルから知って、非常にうれしくなったのを覚えています。

左下の写真、これ私ですが、やっぱり35年前は少しは精悍な顔ですね。今はもう白

髪頭で記憶も定かでないような、日々忘れ物をしたりして大変ですが、このころはまださすがに若いもんだなと思いました。

(スライド 41) 私が当日用意した資料がこれですが、古墳の分布図の左上に、こういう図をつけました。大きさ比べとかと書いて、当時最大の古墳は前方後円墳としては最大が菖蒲塚古墳で 55m くらいですが、ここに 50m のスケールを書いていますので、ほぼそれと同じくらいだとわかります。すでに見つかった三條の保内三王山古墳はそれより小さい、35m くらい。古津八幡山古墳というのはそれを上回る円墳ですから、こういうでかい古墳であり、まぎれもなく県内最大だということを、この図面で表したかったということです。

それから、弥生の高地性集落というのはどういうものかというのを説明するのに、当時私はこういう、小学館の『少年・少女人物日本の歴史』第 2 巻 卑弥呼、という巻を持っていました。こういう漫画を見ていると昔の様子が非常によくわかる、伝えられるわけです。弥生時代の高地性集落のイラストがこれです。先ほどの香川県の紫雲出山遺跡のようなものをモデルにしてこういうものが描かれています。周りを板塀がめぐっていて、周りから攻められても敵が入り込めないようにしています。煙を出しているのは、通信手段としてのろしが使われたというようなことを考えてこのイラストが描かれています。弥生時代の後期というのは、魏志倭人伝に倭国大乱、倭国乱れるというふうに書かれていて、戦乱状態にあったと考えられています。倭人伝にはたくさんクニが出てきますが、邪馬台国連合には 30 くらいのクニが含まれるとあります。いろいろな戦いの中でそれらがまとまっていくというふう考えられていて、必ずしも平和な時代ではなかったということがうかがえます。

当時、奈良国立文化財研究所におられたのがこの佐原眞先生です。佐原眞先生は、当時から、考古学者の説明は非常に難しい。専門用語ばかり言っていて、何を言っているかわからない、こういうことでは国民の支持が得られない、大事な遺跡を守れない、ということを言われ、考古学を易しく、と主張されていました。その佐原先生がこの本の監修者で、弥生時代の専門家です。そのことに刺激を受けて、私はこのような漫画を使ったレジュメを用意しました。甘粕先生から講演会のあと、私のこの説明はよかったよと言われてすごうれしかったのを覚えています。

## 2) 第 3 次調査(1988 年 6 月～9 月)

(スライド 42) 私が担当した 1 次調査では結局遺跡の範囲がわからない、実態がわからないということで、その年続けて 2 次調査が行われて、さらに翌年、6 月から 3 次調査が行われました。この調査は、笹神村在住の川上貞雄先生という、日本考古学協会の会員の考古学の専門家が行いました。川上先生が担当したのは、新津市にはまだ考古学の専門家がいなかったからで、私が県から派遣されてきたのも、考古学の専門家がいなかったからです。川上先生は非常にいろんな調査をされていて経験豊富で、的確な判断をされる人です。それで、この確認調査をされたときに、細いトレンチ、幅 2 m とか 3 m の細いトレンチでは様子がわからないということから、幅 10m のトレンチを山の上からずっと入れました。これは等高線に並行して入れたトレンチです。すると、もうどこからでも堅穴住居が出てくるんです。これは全部堅穴住居です。ここは環濠が出てきました。堅穴住居だらけ。私も思いましたけれど、予想以上に内容が濃いなど。

(スライド 43) これは堅穴住居なのです

が、斜面の高いほうはこういう掘り込みが残っていますが、低いほうは斜面の下なので土が流れています。

(スライド 44) でも復元をするとこういう竪穴住居が累々と見つかったということになります。

(スライド 45) もう1つ驚いたのは、丘の一番高い所から前方後方形のお墓が見つかったことです。これです。山谷古墳が前方後方墳なのですが、これは古墳とは呼びません。周りに溝がめぐるお墓ということで、前方後方形周溝墓と呼びます。前方後方の形が芽生えたころのもの、というような位置づけになります。竪穴住居は16基も見つかかり、柱穴だっていっぱいあり、環濠も出てくる。さらには方形周溝墓という四角い墓だけではなくて、このような前方後方形の周溝墓も見つかる。この調査で遺跡は大規模であることが明らかになり、竪穴住居や環濠が見つかって、遺構も多くて内容も豊富になったということです。前方後方形周溝墓は有力者の墓ということになりますから、この遺跡の集団関係には、何ランクかの階層があるということになるわけです。

(スライド 46) これは現在の遺跡の図になりますが、この古墳のほかに、この辺を掘って、ここの環濠をあてているんですね。それからここ横にずっと2列掘りまして、この竹色はみんな竪穴住居、青は環濠が見つかっていて、一番高い所に前方後方形の周溝墓が見つかったと。まだ南側はほとんど掘っていない状況で、遺跡の広がりはいくらもわからないところがありましたが、遺跡の重要性は増していきました。

(スライド 47) それで青年会議所の方々が、今度はさきほど私がとりあげた佐原眞先生を奈良から呼んで講演会をされました。ちょうど確認調査をやっている最中です。それからもう1人、同志社大学の森浩一先

生。森先生も全国各地で講演会をされていた、大変有名な考古学者です。よくこういう有名な人を引っ張ってきたもんだと思います。9月、10月と続けざまに講演会をやっています。保存要望も、地元の文化財審議委員の方、それから考古学協会の県内に在住している方々、それから今度は考古学協会の本部から、そして新津市郷土史研究会の方々は、それほど人口が多い所ではないのに8,000人の署名を集めました。文化財保存全国協議会、通称文全協と呼ばれる団体も、1,400人の署名を集めて提出いたしました。このように保存の声は盛り上がる一方でした。

### 3) 第7次調査(1990年7月～8月)

(スライド 48) 1990年の7月ごろの写真ですが、植物園のほうは全部調査が終わって土を取ったところです。かなり低くまで土を取っています。もともと土取り事業でしたので保存すべき部分が増える分、採れる土の量が計画よりも減ったので、この部分は土取りの底面を何メートルか低くしたという話を聞きました。

(スライド 49) 南のほうではこのように尾根を断ち切る環濠も出てきました。これはスパッとV字の溝を掘っています。部分的にしか掘っていなくて、ここも掘れるのですが、調査の確認のためにまだ掘らないで残しているのですが、人がすっぽり入るくらいの大きさです。ここで通行を遮断するというわけです。

(スライド 50) それから延々とまだ竪穴住居が出てきました。人が作業をしていますから大きさがわかると思います。

(スライド 51) これは植物園予定地を眺めたときの写真で、かなり本格的に調査が進んでいます。

(スライド 52) 製鉄遺跡も私がやった調査ではまだ十分確認していませんでしたの

で、山の本を切りまして、土を取って行って、本当にないかどうかというのを確認していきました。

(スライド 53) やはり製鉄炉がいくつか出ました。左右同じ製鉄炉ですが、西暦でいうと 12 世紀くらい、平安時代の終わりごろの製鉄炉です。もうカチンカチンに焼けた炉の跡が残っていて、これはすでに調査をしています、この辺から砂鉄を溶かしたときに出る大量の鉄滓、鉄分はほとんど入っていませんが鉄くずです、それが大量に出ました。こういう調査も並行して行いました。

#### 遺跡保存の取扱い決定へ

(スライド 54) 6 次調査では調査の過程で 1 つトラブルがありまして、当時見つけていた炉跡と言われる遺構が工事の途中で壊されるということがありました。まだ確認調査が全体に十分進んでいなかったということもあり、このトラブルを契機に市のほかに県教育委員会も一緒に確認調査をして、判断するということになりました。これは当時の県の教育長、堀川さんという教育長の判断でした。新津出身だと聞きましたが、非常に的確な判断をされる県の行政マンですけれど、私はこの後「沼垂城」木簡が出土した八幡林遺跡の保存についても、いろいろ助けられた教育長さんでした。こうして私は第 7 次調査の現場に参加することになり、新津市に最初に非常勤嘱託で入った渡邊朋和さんという國學院の考古学卒の専門家と、一緒に調査をするということになりました。

このような経緯もあり、結局、この 7 次調査で、全体の遺跡の取り扱いを最終的に決めることになりました。その 7 次調査をやっていた 1990 年、平成 2 年の 8 月 8 日に、文化庁から、河原純之さんという主任文化財調査官に来てもらいました。なぜ来てもらったかという、私たちはこの遺跡

は、将来的に国の史跡にしたい、いや、史跡にすべき遺跡だと考えていました。国の史跡にするということは、文化庁の人が認めてくれないと国の史跡になりませんので、現地に来て見てもらうということです。そしてまた、ここが保存問題で揺れている遺跡だったので、国の専門家から保存の考え方について、ある意味お墨つきをもらいたい、ということでした。河原さんは、私が調査に入っていた 7 次調査の最終段階、お盆の前に来られまして、主要な範囲をほぼ全域見て歩きました。そして、河原さんは「東の吉野ケ里遺跡」だと評価されました。河原さんは吉野ケ里遺跡が大問題になったときの主任調査官ですから、吉野ケ里と言ったということは、あの遺跡が工業団地の計画を中止して国の史跡になったわけですので、私たちにしたら国の史跡になる遺跡、つまり保存すべき遺跡だという評価をもらったと思いました。国の先生はあまりはっきりおっしゃらないんです。でも東の吉野ケ里だと言ったのはそういう意味なのです。

私がこのときにすごく教えられたのは、河原先生は遺跡は大事だと、ここを残せと言われましたが、新津市の公園計画がありましたので、その公園計画にも配慮されていました。配慮されたというのは、重要な遺跡をつぶせと言ったのではなくて、ぎりぎりであっても土量も必要だろうし、そのあとの公園計画もあるので、それにも配慮することを指示されました。この図のちょっと濃いめになった部分は、古墳があったので最初から完全に残すことを決めていて、さらにここも残すということになったんです。斜線が引いてあるここは、河原先生から工事に譲るように指示されたところです。この協議の席で、新津市の川瀬さんという教育長が、ここは新津市にとって大事な公園計画がありますと言われました。そのとき、私は「いや、そんな計画なんかは遺跡

の重要性からみれば必要ないではないか」というようなことを、ちょっと偉そうに口をはさみました。生意気だったと思いますね。そのとき河原先生は、「坂井くん、余計なことは言わんでよろしい」とビシヤリと言われました。さすが国の先生だと思いました。要するに、遺跡保存だけではなく土取りや公園事業も必要性があって行われるのであって、どちらか一方が勝者ではないということをお教えされたのでした。

その3か月後、11月の終わりに、改めて新津市と県の間で取り交わした文書がこういうことでした。ここは残すと。20ヘクタールくらいでした。①大入製鉄遺跡というのはこの辺なのですが、そこは保存する。②土取りラインには傾斜をつけて、可能な限り自然景観を保護する。③八幡山古墳の重要性に鑑み、調査成果を速やかに報告書にまとめ、公表する。④県と市は当該遺跡が国指定史跡になるよう積極的な方策を講じる。市が進めている公園計画の実施にあたっては、遺構を表示するなど遺跡公園として配慮する、というようなことを決めました。新津市は、自治省の「花と遺跡のふるさと公園」というものを計画しまして、その中で保存する遺跡については、遺構の表示もしながら残す、公園整備をするということになりました。

皆さんに申し上げておきたいのですが、国の史跡というのは国が指定するんです。確かに財政補助は国がします。しますが、現地での作業を誰がやるかというと、これは基本的に市町村が担うんです。新津市が指定されるまでの15年間、そのあと10年くらいの整備事業は、全部新津市とそれを引き継いだ新潟市がやったということです。私は、最初の約束を破らず、15年間きちんと事業を進め、今のあのような形にした新津市と新潟市の労は大変大きく、それをたたえたいと思っています。

1つここで、小さい字で入れておきましたが、この直前に長岡市に合併された和島村の八幡林遺跡で「沼垂城」の木簡が突然出土しまして、実は内部では大騒ぎになっていたんです。ですが、トップシークレットですから言えないまま、私は悶々としながら新津市に来て、この協議にあたったということになります。

## 5. さいごに一遺跡の意義

### 古津八幡山遺跡の重要性と前期古墳

(スライド55) これは新潟市文化財センターの相田さんが最近までの成果をまとめた図です。これを見ながら、最後に遺跡の意義を簡単にまとめておきたいと思います。1987年の第1次調査から、2022年度までの25次調査まで、もう延々と調査を続けてきました。これはひとえに、すごい遺跡だったということなのですが、私が予想できなかったのは、埋葬地遺跡と呼んでいた山の反対側のふもとにあった縄文時代の遺跡ですが、近年ここで大型の竪穴建物が見つかりました。もうほんとにでかいです。それからさらにこの北側を掘っていったら、今度は大型の方形周溝墓で埋葬施設が4基もあるものが見つかりました。そんなに複数の埋葬施設をもつお墓はそうそうないんです。しかも、埋葬施設は木棺をじかに埋めるのが普通ですが、ここのお墓は、一番中心部の埋葬施設については木槨をつくっています。つまり木材で部屋をつくって、その中に木棺を入れている。こんなに手厚く埋葬しているお墓が見つかりました。私は本当に思いもよりませんでした。要するに、この遺跡は大規模で長期間継続しており、しかも重層する階層が存在するというのを物語っているということです。

(スライド56) これも相田さんがまとめられた古津八幡山遺跡の動向を示した表で



す。集落の始まりは弥生時代後期の前半、半ばくらいの時期です。西暦で言うと、ここに100という数字が見えていますので、西暦1世紀の終わりごろから、もう少し古いかもしれませんが、そのころから始めて、土器の編年で言うと1期、2期、3期、4期、5期、6期とずっと続きます。畿内の編年で言うと、7期あたりから布留式土器という古墳時代に入ります。その前が弥生時代終末期、最近は終末期のことを古墳時代早期とも言ったりします。こうしてみると、古津八幡山遺跡は非常に長い期間営まれています。越後の同じ時期の遺跡と比べてかなり長いわけです。こういうことは掘ってみて初めてわかることですし、古墳だけ掘ってもわからないことです。

(スライド57) ここで私が注目したいのは、渡邊朋和さんが詳細な報告書にまとめたなかで、ここの土器が3系統に分けられるということです。右上に土器を示していますが、まず北陸系の土器、あまり模様がありません。もう1つは北の東北系の土器。縄目が転がっています。さらに、この新津の古津八幡山遺跡では八幡山式、地元系と言われる土器も出ています。地図で言うところですね。ちょうど新潟市周辺は北陸系と東北系の2つの文化圏が重なる、交わる場所だということです。八幡山式という地元系の土器はどういう土器かというと、東北的な土器の形に、北陸的なハケ目という調整技術、表面を整える技術でつくられている土器です。要するに東北系と北陸系の両方の特徴をもった、2世みたいな土器がこの地元系ということです。このような独自の様式の土器が生まれるということは、それを生み出すだけの人口とか生産力が、この地域で保持されていたということなんだろうと思います。ちょっとスケールが違いますが、縄文時代中期の火焰式土器という様式は、この新潟県の雪国の独自の様式

ですが、その時期というのは非常にこの地域が栄えて、人口も多くなるわけです。そのような時期に越後式と呼んでもいいような火焰式土器ができるというのも、同じような背景なんだろうと思います。

(スライド58) 古墳の分布を地図で表すと、ここに角田、弥彦の古墳群、越後平野の海岸寄りの西側の古墳群、それから越後平野の東側の新津から三条までの古墳群。さらに、ずっと信濃川をさかのぼった、寺泊とか与板とか和島とかという所にも1つ大きな塊があります。3年前ですかね、角田浜妙光寺山古墳という全長50メートルもある立派な古墳がこんなところで今どき見つかるんだなとびっくりしました。これは比較的古い時期だと考えられるので、要するにこの古墳群の継続時期が長いということです。

(スライド59) 角田・弥彦山麓の古墳群では、一番古い弥彦村の稲場塚古墳とか、それから山谷古墳があつて、前方後円墳の菖蒲塚古墳があります。先ほど言ったこういう立派な鏡とかヒスイの勾玉とか、管玉がある。大変副葬品が豊かです。妙光寺山古墳というのは、古い稲場塚古墳と山谷古墳のその間くらいじゃないかと思いますが、何世代かやはりつながっている、それだけ有力な古墳群です。

#### 弥生時代後期からヤマト政権の成立

(スライド60) この古墳文化の中心地といえば、ここに日本地図がありますが、やはり畿内の大和から河内、大阪、ここに古墳時代の中心地があるわけです。古墳時代の1つの勢力圏、ヤマト政権の範囲というのは、新潟県から九州、鹿児島辺りまでの範囲ですが、7世紀後半の律令国家の時期になると、その範囲がほぼそのまま律令国家の範囲になります。このヤマト政権ができる3世紀半ばの前の段階に何があつたかということ、先ほど言った高地性集落という

のがほぼこの地域、越後平野まで分布しているということです。高地性集落を生む社会情勢というものが、このヤマト政権の1つの政治勢力を形づくっている重要な出来事だということがわかります。

ヤマト政権以前、日本海北辺域では高地性集落の成立がほぼ重なる、と書いてありますけれども、高地性集落ができる弥生時代後期というのは、日本列島の中で大きな出来事があります。それは何かというと、鉄の使用です。弥生中期までの日本列島では、鉄はわずかししか使っていません。斧と言えば石の斧、矢じりと言えば石鏃。それが弥生時代後期、西暦1世紀、2世紀になると、ぱたっとその石器がなくなるのです。どこから鉄が入ってきたかという、朝鮮半島から入ってくるんです。それに応じて、この地域で大きな社会変化が起こるんだろうと思います。

特に、弥生時代後期、中期から後期という境目は、ここに書きましたが、後期の初頭に遺跡が断絶する、中期まであった多くの遺跡が衰退するのです。それからしばらくあまり遺跡が見られないのです。弥生時代の後期を4つに分けると、最初の1期、4分の1くらいの時期は、目立った遺跡がほとんどみられない時期になる。そのあと、この新潟県には多くの遺跡が出てくる。それは同じように、この石川県の金沢平野でも、法仏と言われる弥生時代後期の時期になるといっせいに遺跡が出てきます。だから、鉄器が大量に入ってくると、開発も盛んに行われて、人口も増えてくる。その流れは、恐らく山陰とか北近畿とかから、この北陸などに流れてきて、さらにその力が越後平野に及ぶということを考えるべきではないかと思っています。

(スライド61) ヤマト政権の中心地は大和盆地の東南部、纏向遺跡などが知られている場所です。ヤマト政権成立時の最初の

古墳が、桜井市にあるこの箸墓古墳だと言われています。全長280メートルもある立派な古墳です。

(スライド62) 奈良盆地がここにありませんね。大阪湾は西側にあります。反対側、奈良盆地の東側に行くと伊勢湾に出ます。ヤマト政権の中心部はここに成立するんです。間違いなくここです。箸墓古墳とか、古い巨大古墳が6基も連続してバタバタバタと造営されていきます。何でここにヤマト政権の初期の本拠地ができるのか。右下の小さな図は日本列島の地図ですが、当時の日本列島の西日本と東日本をつなぐうえで、地理上もっとも一番つくりやすい地点がここですね。近鉄電車で大阪難波から乗りますと、名古屋行きの特急はここを通過していき、桜井を通過して東へ抜けるこのルートで津に出て名古屋へ行くのです。そうすると、伊勢湾と大阪湾をつなぐ、その中間地点として一番適しているのがここです。ですから、初期のヤマト政権の本拠地である纏向遺跡はここ大和盆地東南部にあって、一番古い巨大古墳の箸墓古墳がこの地にできるということです。最近、纏向遺跡というのは箸墓古墳ができる3世紀半ばよりも70~80年は古くできているとされています。要するに、纏向遺跡は、邪馬台国の時代からここに存続しています。これは明らかです。ここがヤマト政権になる前の政権、中国の歴史書でいう邪馬台国、その本拠地ではないかと言われているということです。

そういう時代と、この越後平野は、まったく無関係ではないということです。そのことを常に意識して歴史を考えることが重要だと思います。

#### 越後平野と古津八幡山遺跡

(スライド63) これが最後のスライドになります。ちょうど弥生時代後期が終わっ

て古墳時代に入るその端境期。考古学では庄内式期という名前がついている時期で3世紀前半です。この時期の人とモノの流れを表したのがこの図になります。国立歴史民俗博物館にいる考古学者、松木武彦さんがこの図をつくっているのですが、この図は全国のさまざまな遺跡の発掘調査のデータを総合して、人の流れを表すとこうなるだろうということをビジュアルに示している図です。弥生時代後期までいろんな地域の土器はあまり活発に動かないのが、この時期になると、新潟もそうですけれど、弥生時代後期の高地性集落がなくなると非常に活発になります。この地域の土器は、長野とか群馬、そして福島、山形と、この周辺地域、関東から中部地方に広く動くようになります。これは、この地域の人移動しているということを示しています。新潟にとって大事なのは、日本列島の広い範囲の北近畿、北陸、東海、中部高地、会津、そしてヤマト政権の勢力内には入らない北日本と、新潟が、越後平野でつながることです。なぜならば、恐らく弥生時代後期から古墳時代にかけて、この地域までは鉄がある程度流通する圏内にあります。そこの地に、北からそれを求めてやってくる人たちがいて、具体的な遺跡名をあげると、巻町にあった南赤坂遺跡などはそういう遺跡の1つです。

この結節点というのが、新潟を考える場合の大変重要なキーワードです。私はおろかにも、学生時代に関西で考古学を勉強して新潟に戻ってくるときに、関西で勉強したことなど何の役にも立たないとか、新潟は別世界だとかといった先入観をもって帰ってきました。ところが帰ってきてみたら全然違う。私は何を6年間大学で勉強したのかと思うくらい、いろんなことがつながりました。そのような集大成の遺跡として、私はこの古津八幡山遺跡、八幡山古墳と出

会ったような気がいたします。弥生・古墳時代移行期の越後平野を象徴する遺跡です。

最後にもう1つ言っておきたいのは、新津というのは日本でも有数の鉄道都市です。私は小学校2年のとき、昭和37年、特急とき号が初めて東京まで走ったときに、新潟から東京まで乗車して行きました。新潟を出てすぐ、最初に新津駅に停まるんです。そのときの停車駅は東京までに新津と長岡と高崎だけです。その3つの駅になぜ新津が入るかが最初理解できませんでした。でもそのとき見た汽車の転車台とか、駅の活気ある姿を見ました。新津は信越線、羽越線、磐越西線がまさに交わるハブとなる十字路の駅で、いろんな文化が集約される地です。鉄道は近代のことですけれども、古墳時代、さかのぼって弥生時代も同じような文化や歴史の十字路であることを物語るわけです。小学校2年のときの新津駅の思い出は、弥生時代から古墳時代のこの古津八幡山遺跡の歴史とも結びついたということを最後に申し上げておきたいと思います。

今後さらに遺跡のさまざまな活用が進んで、多くの市民の方々に親しまれることを期待しまして、私のつたない話を終わりにしたいと思います。ご清聴どうもありがとうございました。

【註】遺跡の名称は、2005年、国の史跡に指定される際、遺跡所在地の大字の地名「古津」を冠して「古津八幡山遺跡」とされた。それまではたんに「八幡山遺跡」と呼ぶことが多く、報告書の書名も同様であった。なお、古墳の名称については、新潟大学考古学研究室による1992年の最初の報告書『古津八幡山古墳Ⅰ 1991年測量調査報告』（新津市教育委員会）から、「古津八幡山古墳」とされていた。



スライド1



スライド2



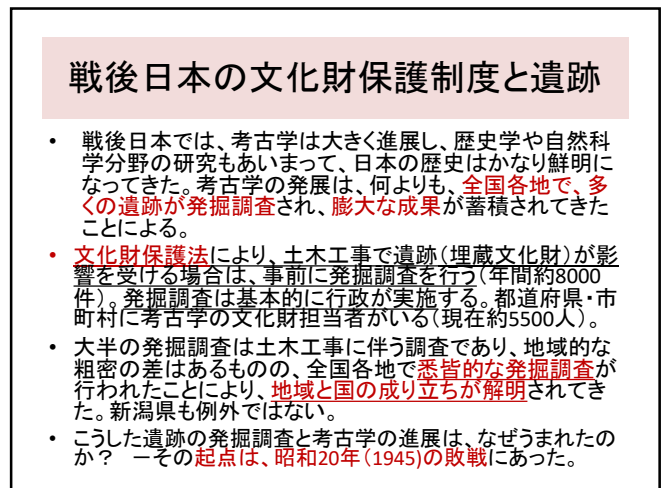
スライド3



スライド4

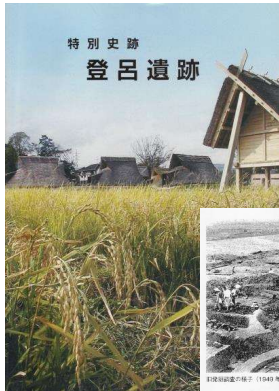


スライド5



スライド6

## 戦後の日本に夢と希望を与えた遺跡



特別史跡  
登呂遺跡

### 登呂遺跡(静岡県) 1947~49年

- ・敗戦で戦前教えられた歴史を失った日本
- ・学界総出で調査に取り組む
- ・弥生時代(約2000年前)の集落と水田が発見
- ・国民上げて夢と希望を見た



戦後の発掘調査

出土した農具

スライド7



発掘に関わった人たち(昭和25年)

日本考古学協会設立へ

登呂遺跡

資金難に国会動く  
半年度 五百万円を請願

登呂博物館の展示

スライド8



### 考古学者 大塚 初重さん

7月21日、95歳で死去



### 古代の追究 戦争原点

「新潟日報」(共同通信系)2022.9.27

スライド9

## 岩宿遺跡(群馬県) 1949年の発掘調査(1974年史跡指定)

- ・それまで未確認であった旧石器が発見され、歴史は1万年以上にさかのぼった。

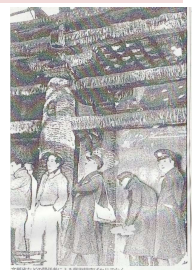


- 遺跡と考古学は国民に希望を与え、その重要性が広く認識された。

スライド10

## 文化財保護法の成立(1950年)

- ・1950年『文化財保護法』制定。  
1949年1/26 法隆寺金堂火災発生
- ・戦前の国宝保存法(古社寺保存法<1897年>)、史蹟名勝天然記念物保存法(1919年)を継承、まとめる。
- ・「埋蔵文化財」の規定(発掘届)誕生  
→登呂遺跡などの影響で全国的に遺跡の発掘が盛んになり、調査方法などに問題が生じたため、それを規制。



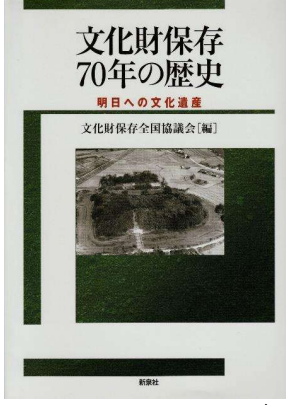
戦後、国民は、国や地域の成り立ちの真実を知りたいと願い、各地に埋もれた遺跡に真の歴史を求めた。国民の理解と協力が支えられて、これまで多くの発掘調査が行われてきた。

スライド11

## 市民運動で保存されたイタスケ古墳(大阪府堺市) 1955年史跡指定



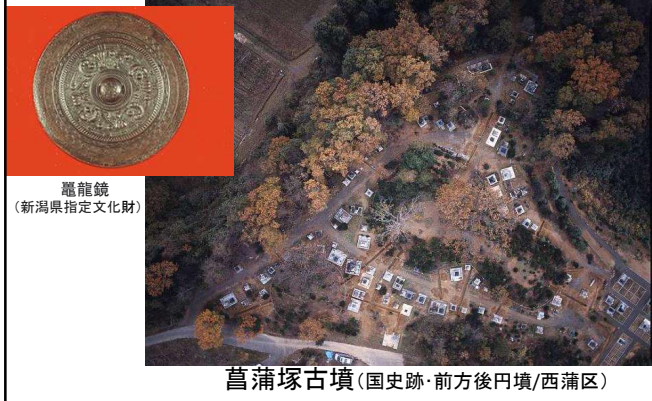
- 遺跡保存と市民運動
- ・研究者だけではなく、わがまちの遺跡・文化財に対する住民の思いが保存の原動力
- ・1922年史跡指定の特別史跡平城宮跡は、建築史の関野貞が確認し、地元の植木職人・棚田嘉十郎が保護運動を展開
- ・よい意味での郷土意識が遺跡保存を支える



2017年

スライド12

## 2. 新潟にもあった古墳とその前史



スライド13

## 1) 山谷古墳の「発見」(旧巻町)

- 1981年11月25日:新潟県教育委員会による角田丘陵分布調査/東北電力鉄塔建設(高橋保氏・坂井)
- 山陰・北近畿で見られる弥生台状墓、古墳などの発見が期待された(指導:文化行政課金子拓男係長)
- 雨の中を踏査。午後薄暗くなりかけたとき、古墳を発見。きわめて端正な墳丘の形状であり、前方後方墳と判断できた。ほか1基(岩室・観音山古墳)
- 後日、巻町の藤田治雄氏が1959年に発見していたことが判明。当時は正しく評価されなかった。
- 新潟大学考古学研究室(甘粕健<sup>1977新大着任</sup>)・巻町教育委員会(1982年測量)、1983年・87年発掘(『越後山谷古墳』1993)

スライド14



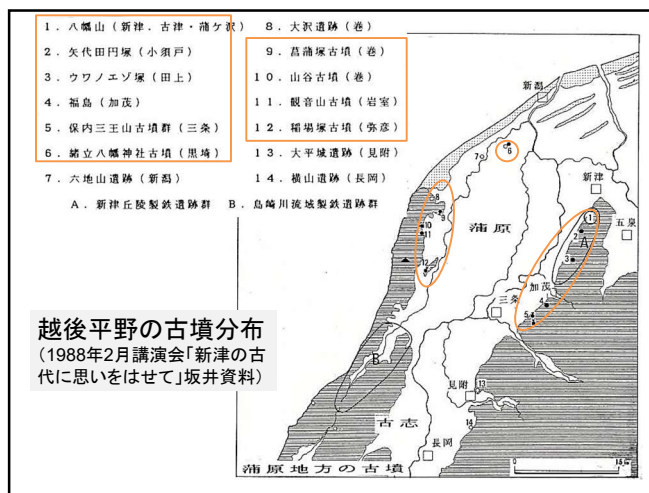
スライド15



スライド16



スライド17



スライド18

### 2) 弥生/古墳の土器編年

**第Ⅰ期**  
畿内V様式  
末期  
塚崎Ⅰ式

---

**第Ⅱ期**  
庄内式  
月影式

---

**第Ⅲ期**  
布留(古)式  
古府クルビ式

横山勝栄 坂井秀弥「内越遺跡出土土器の越後における編年の位置」『内越遺跡』一九八三 土器編年は金子拓男係長の指導

① 現在知られている弥生後期の土器のうち、六地山遺跡のものは相対的に古く、前半から中葉前後に位置づけられる。●坂井1985「越後の弥生後期についての覚書」『新潟県史研究』17

スライド19

地域	備考
六地山	1・2・10・19・20 25・26・30・42・43 50-53
大平城	3・5・31・36
内越	4・6・13・16・18 22・23・27・34・35 38
山根	7・15・21・24・28 37・44
笛吹田	8・17・45・46
大沢	11・12・14・29・32 33・39・40・41 47-49

② 弥生後期後半に形成される北陸地方の地域圏のなかで、東北部を除く越後は能登・越中・佐渡とともに北陸北東部に位置し、古墳成立期まに至るまで、その地域差が継続する。  
●坂井1985「越後の弥生後期についての覚書」『新潟県史研究』17

スライド20

**庄内**

**布留O**

**庄内**

**布留O**

新潟県の土器編年(坂井・川村1993)  
川村浩司氏が主導した日本考古学協会新潟大会は東日本の広域編年に大きく寄与

スライド21

### 3) 高地性集落の存在

③ 越後でも高地性集落が存在し、同時期の北陸地方に共通し、畿内を中心とした西日本の社会的動乱が及んでいことがうかがえる。●坂井1985

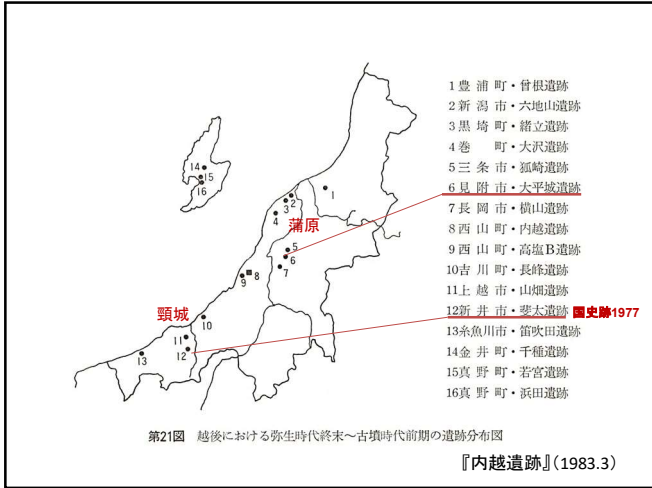
スライド22



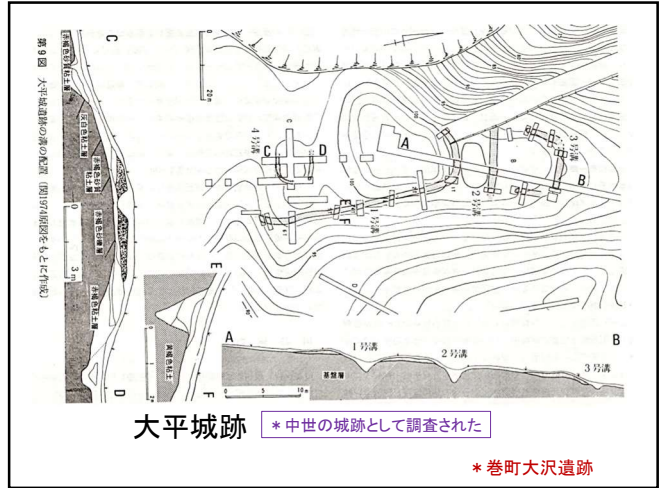
スライド23



スライド24



スライド25

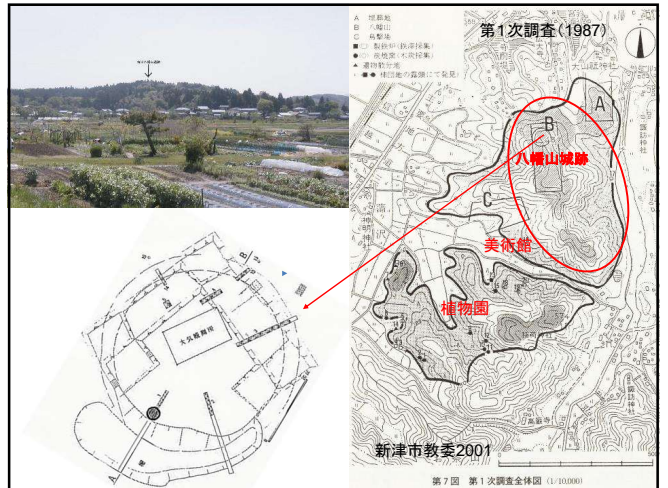


スライド26

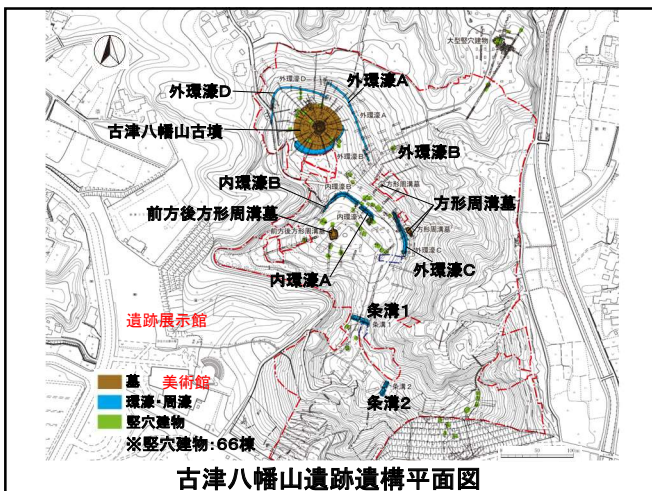
### 3. 古津八幡山遺跡の発見 (第1次調査)

- 1987年: 磐越自動車道建設に伴う盛土土砂採取、および新津市総合運動公園建設(約45ha)の計画
- 確認されていた遺跡: 鳥撃場遺跡(縄文)、埋葬地遺跡(縄文)、八幡山城跡(中世)、居村製鉄遺跡(古代)
- 87年9月28日～10月9日/埋蔵文化財の確認調査: 主体は新津市教委、調査員は県文化行政課職員(戸根氏・坂井<sup>10/5-9</sup>ほか、寺崎氏から対象地の確認を十分行うよう指示される)
- 調査成果: 大型円墳、大規模弥生集落、大規模古代製鉄遺跡等の確認

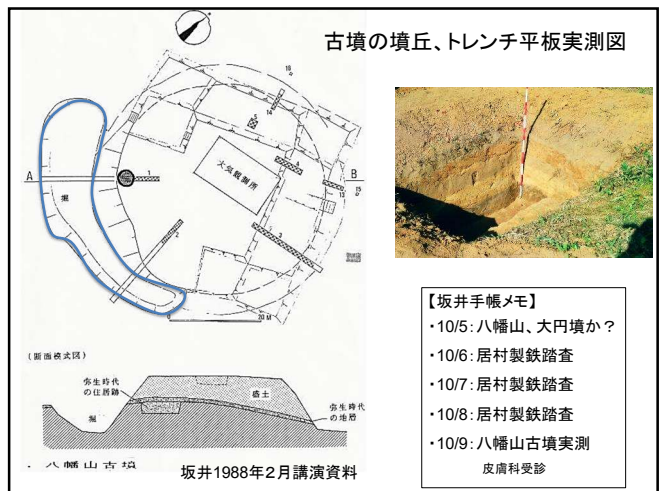
スライド27



スライド28

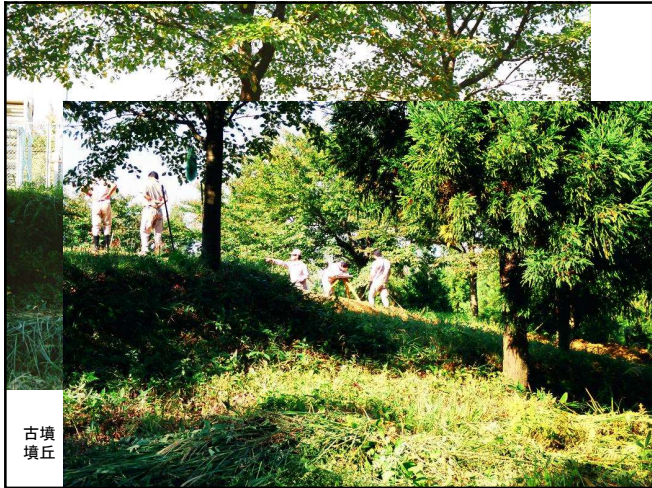


スライド29



スライド30





スライド31



スライド32



スライド33



スライド34



スライド35



スライド36



居村遺跡E地点(8世紀)

箱形炉

スライド37



古代の製鉄実験(福島県まほろん)

スライド38

### 第1次調査報告

(新津市2001『八幡山遺跡発掘調査報告書』引用)

- 八幡山城跡: 堀と盛土の形状・構造から中世の山城とは考えられず、古墳時代の円墳とみるのが妥当と考えられる(仮称: **八幡山古墳**)。 (略)直径55m以上の円墳とすれば県内最大である。⇒新潟大学1991年測量調査
- 古墳造営前には、この丘陵尾根上に弥生時代中期～後期の集落跡が存在する(仮称: **八幡山遺跡**)。遺跡の広がりには今回の調査では確認できなかったが、尾根のピークまで延びていたことは確認された。土器は東北地方南部に分布する天王山式土器で、県内では数少ない例である。なお、**丘陵尾根上に立地することから、一般的な農村ではなく、特殊な性格をもつもの**と考えられる。
- 弥生時代の集落、古代の製鉄遺跡は分布・確認調査が不十分なので、さらに詳細な調査を要する。

スライド39

### 4. 保存の声と確認調査の継続

1) 講演会「新古今集」1988.2

**当日のレジュメ**

1. 講演会の意義

2. 八幡山遺跡の発掘調査と調査結果の報告

3. 八幡山古墳の調査結果と調査結果の報告

4. 八幡山古墳の調査結果と調査結果の報告

5. 八幡山古墳の調査結果と調査結果の報告

6. 八幡山古墳の調査結果と調査結果の報告

7. 八幡山古墳の調査結果と調査結果の報告

講演会「新津の古代に思いをはせて」  
1988年2月11日 新津青年会議所主催  
「新古今集」(新津の古代と今を考える集い)  
・坂井は県の職務として調査成果を報告

スライド40

坂井1988年2月講演資料

八幡山  
葛蒲塚  
三王山1号  
新津  
新津

50M

大ききくらべ

墳丘規模は県内最大

「文化遺産の世界」№38

学習まんがのイラストを引用 (小学館1984年『少年・少女人物日本の歴史』第2巻 卑弥呼 監修佐原真)

スライド41

### 2) 第3次調査(1988. 6～9)

2次は87年11/24～12/8

環濠

第3次調査 北地区 (1988.6～9:川上貞雄氏担当)  
幅広いトレンチを斜面に設定。竪穴住居多数、環濠を確認

スライド42



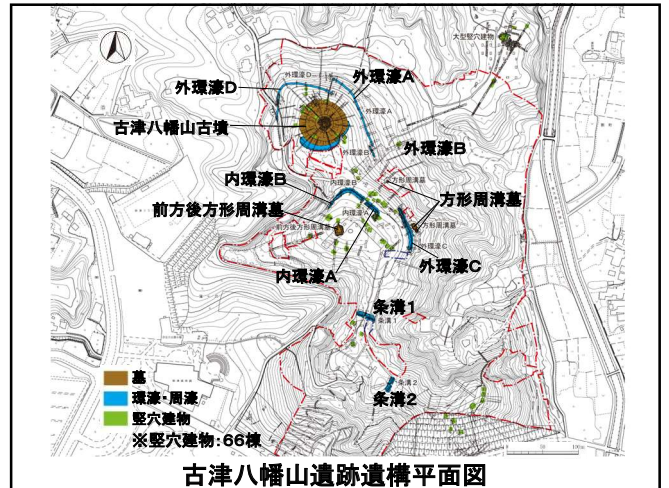
スライド43



スライド44



スライド45



スライド46

### 保存要望など

➤ 講演会

- 1988/9/4: 佐原真氏(奈良国立文化財研究所) 新津青年会議所主催
- 10/24: 森浩一氏(同志社大学) 同志社大学校友会新潟支部主催

➤ 保存要望: 新津市文化財調査審議会、日本考古学協会県内在住会員、日本考古学協会、新津郷土史研究会(署名8422名)、文化財保存全国協議会(署名1400名)など多数。1988年~90年8月まで。

スライド47



スライド48



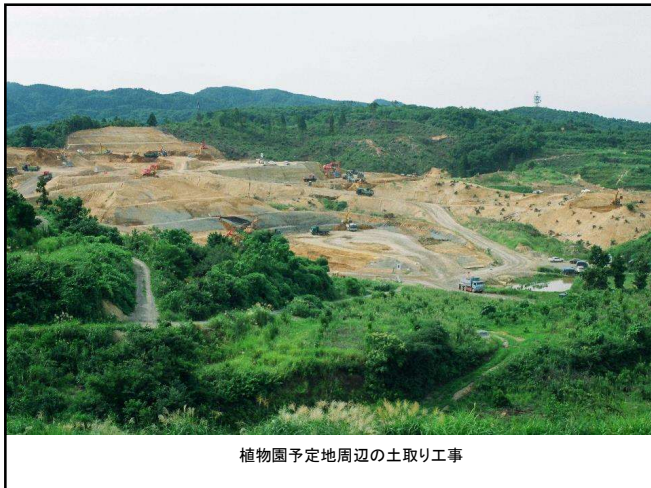
南地区 環濠(条溝2)

スライド49



第7次調査 竪穴住居(斜面に造成されたものが多く、斜面下方は遺存しない)

スライド50



植物園予定地周辺の土取り工事

スライド51



製鉄関係遺構の確認(山林では可能性のある斜面を伐採し有無確認)

スライド52



製鉄炉の調査

スライド53

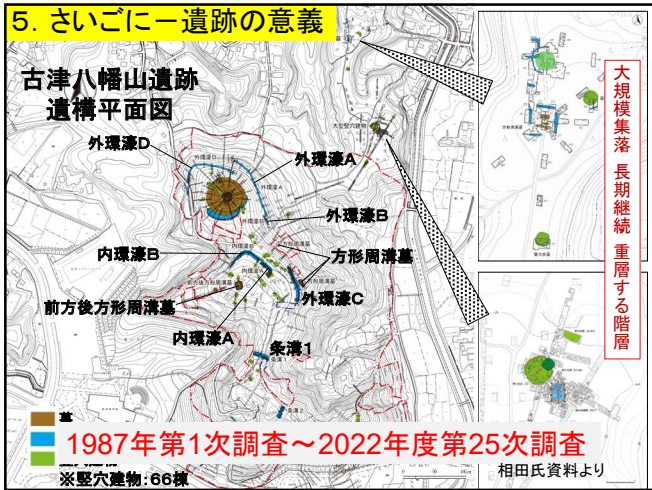
**11/20八幡山遺跡**  
【県・市の保存合意】  
1990年(平成2)11月29日合意文書  
八幡山遺跡の主要部分を含む19.7haを現じよう保存する。

- ①大入製鉄遺跡は保存する。
- ②土取りラインには傾斜をつけて可能な限り自然景観を保護する。
- ③八幡山古墳の重要性に鑑み、調査成果を速やかに報告書にまとめ、公表する。
- ④今後の取扱い
  - ・県と市は当該遺跡が国指定史跡になるよう積極的な方策を講じる。
  - ・市が進めている公園計画の実施にあたっては遺構を表示する等

⇒自治省「花と遺跡のふるさと公園」整備事業  
⇒2005年史跡指定(国史跡の指定・整備は財政補助はあるが、基本的に市町村が担う。新津・新潟市の労は大い。) )

新津市教委2001  
1990年8月8日文化庁河原純之主任調査官現地確認。遺跡保存とともに公園計画にも配慮しつつ、「東の吉野ヶ里」と評した。

スライド54



スライド55

### 古津八幡山遺跡の動向 相田氏資料より

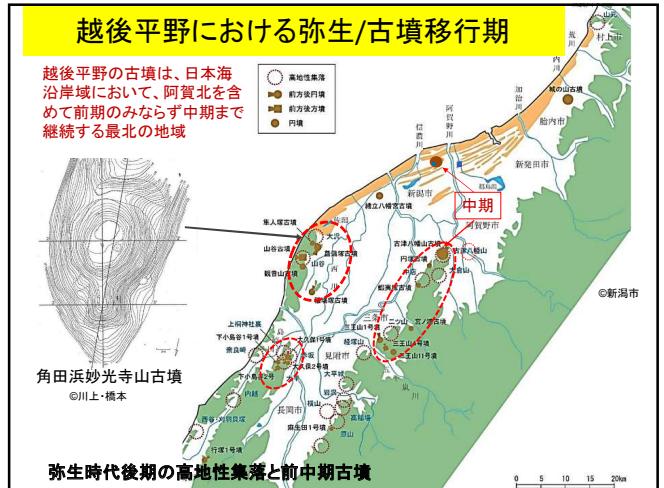
時代	北陸西部編年	古墳集積編年	新潟シンボジウム編年	古津八幡山遺跡			
弥生時代前期	小松 専光寺 戸水B			環濠	竪穴建物	竪立柱建物	墓
弥生時代後期	V-1群 V-2群 2-1群 2-2群	築造式 法仏式	1期 2期	集落の出現 外環濠の掘削	S1802・S1821 S10603 S103S03 S103S05 S10602 S1728	竪立柱建物群?	方形周溝墓 SX1005 SX1006 SX1004 S2743 (大型方形周溝墓) S2822
早期弥生時代 古墳時代終末	3群 4群 5群	月影式 白江式	3期 4期	環濠が上層まで埋没 →一部再掘削? 内環濠掘削?	S103S06 S103N03	大型竪穴建物(S11) 竪穴住居(S1465)	前方後方形周溝墓 (SX09514)?
古墳時代前期	7群 8群 9群 10群	高島式	1期 2期 3期 4期	高地性集落の廃絶、平地での集落の出現			

※赤字は平成29年度以上の調査で見つかった遺構

スライド56



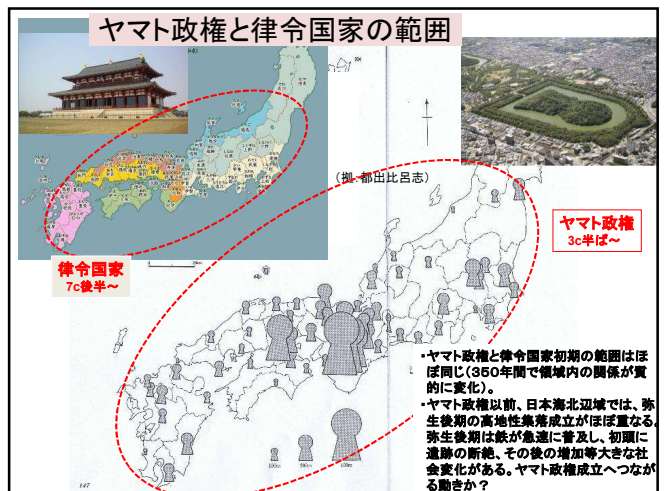
スライド57



スライド58



スライド59



スライド60

**ヤマト政権成立の地、大和盆地東南部**  
 纏向遺跡・箸墓古墳/オオヤマト古墳群

景行天皇陵古墳  
 箸墓古墳  
 纏向遺跡(ヤマト政権成立前に成立)  
 箸墓古墳 3世紀半ば  
 歴博模型  
 全長280m、後円部径160m  
 (拠: 桜井市埋蔵文化財センター)

スライド61

**ヤマト政権誕生の地はなぜここのか？**

三島古墳群  
 佐紀古墳群  
 ヤマト政権成立の地  
 オオヤマト古墳群  
 纏向遺跡(邪馬台国?)  
 百舌古市古墳群  
 奈良盆地  
 大阪は畿内の西口  
 西日本-韓半島-中国  
 奈良は東西日本を連結  
 大阪湾-伊勢湾  
 壬申の乱・聖武天皇の東国行  
 韓半島  
 西日本  
 東日本

スライド62

**3世紀前半(庄内式期)の人の動き**  
 活発な土器・ヒトの移動

- 「庄内式」の時期は、全国的に各地の土器が活発に移動する(人びとの移動・交流が広域に活発化)。
- 新潟を含む北陸東部の土器は、高地性集落の終焉とともに、長野や群馬、福島・山形などに及ぶ。
- 新潟は東日本においては、北近畿・北陸・東海・中部高地、会津、北日本などとの複合的な結節点となる。

越後平野  
 大和盆地  
 3世紀前半の人の動き  
 (松木武彦2007『列島創世紀』)

今後、さらに遺跡のさまざまな活用が進み、多くの市民に親しまれることを期待します！

スライド63

## 第2章 企画展の概要と 企画展関連講演会アンケート結果

令和4年度は、史跡古津八幡山 弥生の丘展示館で企画展を2回開催した（企画展1・2）。なお、企画展2については新潟市新津美術館との共催事業として開催した。

また、企画展2の会期中、外部から講師をお招きするなどし、新潟市新津美術館の市民ギャラリーとレクチャールームにおいて関連講演会（第1章に収録）を2回実施したほか、市文化財センター企画展担当職員による展示解説を行った。講演会は新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、会場の定員を減らしたほか、オンラインでの配信を行った。

各講演会では参加者を対象にアンケートを実施した。アンケート結果については（2）に収録している。

以下、企画展及び関連講演会の概要と、関連講演会のアンケート結果などについて記す。

### （1）令和4年度「史跡古津八幡山 弥生の丘展示館」企画展の概要

#### 企画展1 「古津八幡山遺跡発掘調査速報展 —令和3年度の発掘調査成果—」

**開催期間** 令和4年4月22日（金）～9月4日（日）

**会場** 史跡古津八幡山 弥生の丘展示館

**概要** 史跡古津八幡山遺跡では、史跡をより適切に保存・活用していくため、史跡外における遺跡のさらなる状況把握を目的とした発掘調査を行っている。

令和3年度は標高約25mの史跡指定地外の丘陵中腹域において発掘調査を行い、古津八幡山遺跡で最大となる方形周溝墓や、竪穴住居などが確認された。方形周溝墓の内部からは3基の埋葬施設が確認され、周溝からは供献土器と考えられる甕やガラス玉が出土した。また、竪穴住居は弥生時代後期の建物で、弥生時代後期にも丘陵中腹域が利

用されていることが明らかになった。

企画展では方形周溝墓や竪穴住居から出土した土器やガラス玉など約300点の資料のほか、調査写真やイラストなどを展示し、令和3年度の調査成果について速報展示を行った。

**展示解説** 令和4年7月24日（日）13:30～  
市文化財センター職員

#### 企画展2 「古津八幡山遺跡の過去・現在・未来」

**開催期間** 令和4年9月13日（火）～  
令和5年3月12日（日）

**会場** 史跡古津八幡山 弥生の丘展示館

**概要** 古津八幡山遺跡発見から35周年、弥生の丘展示館開館10周年、さらには新津美術館開館25周年を記念し、隣接施設である新潟市新津美術館と共催した企画展である。

これまでの古津八幡山遺跡の発掘調査や史跡整備の歩み、弥生の丘展示館での活用事業等について振り返ったうえで、今後の展望や課題なども示した。

展示資料は、古津八幡山遺跡の発掘調査で出土した土器や石器、金属製品、玉類などのほか、遺跡の保存運動や史跡指定関連の書類、弥生の丘展示館で過去に実施したイベントや体験の写真や作品、さらには開館からこれまでに実施した企画展やシンポジウムなどのチラシやポスターを展示した。なお、会期中に1回展示替えを行い、令和4年度の発掘調査成果についても紹介した。

関連講演会は、県あるいは国の担当者として古津八幡山遺跡の発見や保存、史跡指定などに関わられた坂井秀弥氏（新潟市歴史博物館館長・奈良大学名誉教授）からご講演頂いた。

**展示解説** 令和4年11月20日（日）15:45～  
令和5年2月5日（日）15:45～  
市文化財センター職員

企画展関連講演会（第1回）

**演題** ここまでわかった！古津八幡山遺跡  
—最新の調査成果を交えて—

**演者** 相田 泰臣（市文化財センター学芸員）

**日時** 令和4年11月20日（日）13:30～15:30

**会場** 新潟市新津美術館市民ギャラリー

**人数** 25名（会場17名・オンライン配信8名）

企画展2関連講演会（第2回）

**演題** 新津の山に大きな遺跡と古墳があった！  
—歴史を変えた古津八幡山遺跡—

**演者** 坂井 秀弥氏（新潟市歴史博物館館長・  
奈良大学名誉教授）

**日時** 令和5年2月5日（日）13:30～15:30

**会場** 新潟市新津美術館レクチャールーム

**人数** 93名（会場58名・オンライン配信35名）

令和4年度 新潟市 史跡古津八幡山 弥生の丘展示館 企画展2  
古津八幡山遺跡発見35周年・弥生の丘展示館開館10周年記念企画展

**観覧無料**

# 古津八幡山遺跡の 過去・現在・未来

今年、昭和62（1987）年に古津八幡山遺跡が発見されてから35年、平成24（2012）年に古津八幡山遺跡のガイダンス施設、弥生の丘展示館が開館してから10年を迎えます。  
この節目の年に、古津八幡山遺跡のこれまでの発掘調査や史跡指定、その後の整備・活用などのあゆみ、今後の課題などを展示・解説します。

**令和4（2022）年 9月13日（火）** ▶ **令和5（2023）年 3月12日（日）**

企画展1	企画展2	企画展3
<b>古津八幡山遺跡</b> ここまでわかった！古津八幡山遺跡—最新の調査成果を交えて— 演者 相田泰臣（新潟市文化財センター学芸員） 日時 11月20日（日）13:30～15:30 会場 新潟市新津美術館 市民ギャラリー 人数 25名（会場17名・オンライン配信8名）	<b>新津の山に大きな遺跡と古墳があった！</b> —歴史を変えた古津八幡山遺跡— 演者 坂井秀弥（新潟市歴史博物館館長・奈良大学名誉教授） 日時 2月5日（日）13:30～15:30 会場 新潟市新津美術館 レクチャールーム 人数 93名（会場58名・オンライン配信35名）	<b>史跡古津八幡山 弥生の丘展示館</b> 古津八幡山遺跡のガイダンス施設、弥生の丘展示館が開館して10周年を迎えます。 展示期間 12月17日（土）～1月13日（日） 会場 新潟市新津美術館

企画展2ポスター

令和4年度 史跡古津八幡山 弥生の丘展示館 企画展1

# 古津八幡山遺跡 発掘調査速報展

～令和3年度の発掘調査成果の速報～

**観覧無料**

令和3年度の調査では、古津八幡山遺跡で最大となる方形周溝墓が新たに発見されました。方形周溝墓の内側からは3基の埋葬施設が確認され、ひとつのお墓に複数の埋葬が行われていたことが明らかになるなど、大きな発見がありました。  
本企画展では、令和3年度に実施した発掘調査の成果を中心に展示・解説します。

**令和4（2022）年 4月22日（金）～9月4日（日）**

開催時間 10:00～17:00  
休館日 毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は翌日）、5月10日（火）臨時休館  
企画展会場 史跡古津八幡山 弥生の丘展示館（新潟市東区）

展示時間 令和4（2022）年7月24日（日）13:30～  
会場 史跡古津八幡山 弥生の丘展示館  
※要予約（直接会場にお越しください）

**史跡古津八幡山 弥生の丘展示館**  
〒952-8584 新潟市東区古津八幡山（古津八幡山）  
TEL 025-278-0460 FAX 025-278-0464  
http://www.city.niigata.jp/kyokoku/bunka/hibiki/hakaba/hibiki\_hakaba/hibiki\_hakaba.html

**新潟市文化財センター**  
〒951-8522 新潟市中央区大町1丁目1-1  
TEL 025-278-0460 FAX 025-278-0464  
http://www.city.niigata.jp/kyokoku/bunka/hibiki/hakaba/hibiki\_hakaba.html

企画展1ポスター

（2）企画展関連講演会アンケート結果

アンケートは各講演会ごとに実施した（61頁）。2回分の講演会のアンケート結果を合計した表・グラフは60頁に掲載した。なお、過去のアンケートで展示会場周辺での講演会開催の要望を頂いていたが、今回、いずれも展示会場に隣接する新潟美術館で開催することができた。

また、2回とも会場の他にオンライン配信による聴講も行っており、オンライン配信での聴講は2回合わせて118名中43名であった。オンライン配信の聴講者にはアンケート調査を実施していないため、本結果には含まれていない。今後はオンラインでの聴講者にもアンケートを実施する方向で検討したい。

**年齢** 講演会参加者の年齢構成は、70代が最も多く、次いで60代、50代と続く。これまで同様、若年層の参加が少ない傾向にある。

**住まい** 前年度同様、市外・県外からの会場参加者数は少ない状況が続いている。一方、オンライン配



信では市外・県外の参加者数は比較的多い。

市内の参加者については、展示会場、講演会場である秋葉区の参加者が4割近くと最も多かった。

**交通手段** 交通手段はこれまで同様、圧倒的に自家用車が多いが、会場が新津美術館であったことから電車、バスを利用しての参加者もみられた。

**情報入手先** ポスター・チラシと市報で全体の半数以上を占める。前年度に比べポスター・チラシの割合が急増しており、新型コロナウイルス対策の変化とともに、外出機会が増加したことと関係すると思われる。

次いでインターネット、新潟県が作成しているパンフレット「まいぶんなび」が続き、従来どおり一定の割合を占める。

**講演会について** 講演会や講演会場については概ね好評であった。当日配布資料については、見やすくなるように従来よりも大きめに作成・印刷したこともあり大変満足とのご意見を複数頂いた。

以下、頂戴したおもなご意見などを箇条書きで提示し、今後の検討・改善などに活かしたい。

**(第1回)**

- ・地元に住ながら知らなかったことが多くあり、興味深く聴講した。

- ・木槨構造の埋葬施設が見つかったというのは興

味深い。最近の調査で丘陵中腹域の利用がだいぶ明らかになってきた。

- ・資料が充実しており、文字サイズが大きくて読みやすかった。

**(第2回)**

- ・調査に携わった坂井先生の当時の思い、葛藤がよく伝わり、大変良いお話だった。保存への取り組み、地元の熱意、関係者の努力の話にとっても感動した。そんな思いを考えながら改めて現場に行ってみたい。

- ・分かりやすく、新たな知見が数多くあり勉強になった。遺跡保存、活用に至る史的背景まで説明される格調高い、丁寧なお話が素晴らしかった。

- ・新津が北と西との重要な中継点、結節点であることが良く分かった。

- ・資料がカラーで美しく、見やすくて満足。

**希望するイベント・講演会、その他意見**

- ・秋葉丘陵の歴史、地質、役割をさまざまな角度から学習したい。

- ・実家近くの三条市保内三王山古墳関係の講演。

- ・引き続き周辺施設と連携をして、遺跡や展示館のPRをしていって欲しい。

- ・周辺施設と共催した催し物を多くやって欲しい。

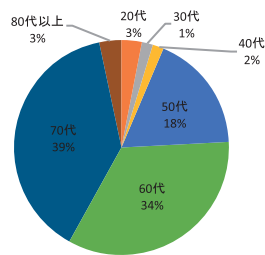
- ・発掘作業の体験をしたい。

<p>令和4年度 史跡古津八幡山 弥生の丘展示館 企画展関連講演会 アンケート</p>	
<p><b>お越しの皆様へ</b> 本日は史跡古津八幡山弥生の丘展示館 企画展関連講演会「 」 にお越しいただき、誠にありがとうございます。 弥生の丘展示館の活動について、今後の参考とさせていただきます。ご意見をお聞かせ下さい。 ご協力をお願いします。 ※講演会開催日：令和 年 月 日（ ）</p>	
<p><b>1 あなたのこと（お客様のプロフィール）を教えてください。</b> 次のそれぞれの質問で、あてはまる項目を1つだけ選び、○で囲んでください。</p>	
①年齢は	20歳未満 20代 30代 40代 50代 60代 70代 80代以上
②性別は	男性 女性
③職業は	小学生 中学生 高校生 大学生 (国大・専門学校生) 会社員 公務員 自営業 教職員 主婦 無職 その他
④お住まいは	北区 東区 中央区 江南区 秋葉区 南区 西区 西原区 市外 ( 市・町・村 ) 県外 ( 都・道・府・県 市・町・村 )
⑤ごちねへの主な交通手段は	自家用車 自転車・バイク 徒歩 タクシー 路線バス・区バス JR その他 ( )
⑥弥生の丘展示館へ行ったことはありますか	ない 1回 2-5回 6-9回 10回以上
⑦弥生の丘展示館で開催中の企画展「古津八幡山遺跡の過去・現在・未来」はご覧になりましたか	はい いいえ ※いいの方に質問です。これからご覧になる予定はありますか。 ある ない
⑧今回の講演会の情報入手先	ポスター・チラシ 市報 その他雑誌 テレビ・ラジオ 新聞 雑誌・情報誌 インターネット 市ホームページ まいぶんなび ※複数回答可 人から聞いて 弥生の丘展示館を利用して その他 ( )
<p>※質問は表・裏の両面にあります。【ウラ面に続きます】</p>	
<p><b>2 講演会について</b> 次のそれぞれの質問で、あてはまる答えを1つだけ選び、○で囲んでください。 ※答えられない質問は、記入する必要はありません。</p>	
①講演会・時期	大変満足 満足 普通 不満 大変不満
②講演会・場所	大変満足 満足 普通 不満 大変不満
③講演会・内容のわかりやすさ	大変満足 満足 普通 不満 大変不満
④施設全般：映像・音声、空調、バリアフリー	大変満足 満足 普通 不満 大変不満
⑤職員対応：言葉づかい、マナー、対応、説明	大変満足 満足 普通 不満 大変不満
⑥印刷物：わかりやすさ	大変満足 満足 普通 不満 大変不満
⑦全体の満足度	大変満足 満足 普通 不満 大変不満
⑧次回講演会に参加したいですか？	ぜひ参加したい あまり参加したくない できれば参加したい 参加しない
⑨右記の施設などを利用したことがありますか？	弥生の丘展示館 古津八幡山遺跡歴史の広場 フラワーランド 県立植物園 県立文化センター 石造の世界館 (石油遺産関係) ※複数回答可 中野記念館 ビジターセンター その他 ( )
<p>※今後の会場場所についてのご希望をお書きください。 ・今回の場所 (新津美術館) で満足 ・別の場所を希望 ( 場所 ) ( )</p>	
<p>※今回の講演会についてご自由にお書きください。</p>	
<p>※ご希望のイベント・講演会等がございましたらお書きください。</p>	
<p>※弥生の丘展示館へのご意見・期待すること等ございましたらご自由にお書きください。</p>	
<p>ご協力ありがとうございました</p>	

アンケート用紙 (表・裏)

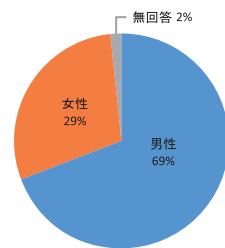
1.年齢

20歳未満	0
20代	2
30代	1
40代	1
50代	11
60代	21
70代	24
80代以上	2
無回答	0
計	62



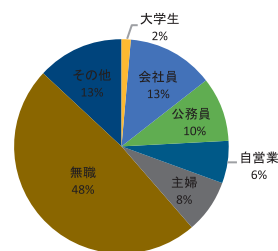
2.性別

男	43
女	18
無回答	1
計	62



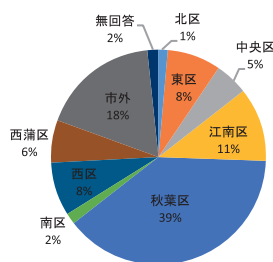
3.職業

小学生	0
中学生	0
高校生	0
大学生	1
会社員	8
公務員	6
自営業	4
教職員	0
主婦	5
無職	30
その他	8
無回答	0
計	62



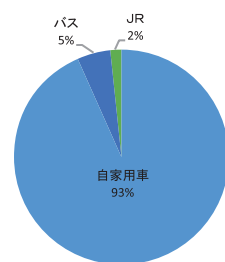
4.住まい

北区	1
東区	5
中央区	3
江南区	7
秋葉区	24
南区	1
西区	5
西蒲区	4
市外	11
県外	0
無回答	1
計	62



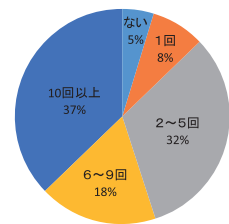
5.交通手段

自家用車	58
自転車・バイク	0
徒歩	0
タクシー	0
バス	3
JR	1
その他	0
無回答	0
計	62



6.弥生の丘展示館来館回数

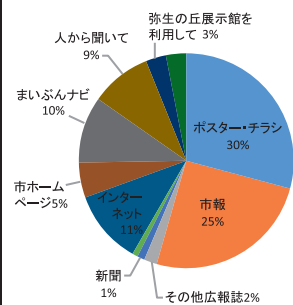
ない	3
1回	5
2~5回	20
6~9回	11
10回以上	23
無回答	0
計	62



7.講演会情報入手先

ポスター・チラシ	29
市報	25
その他広報誌	2
テレビ・ラジオ	0
新聞	1
雑誌・情報誌	1
インターネット	11
市ホームページ	5
まいぶんナビ	10
人から聞いて	9
弥生の丘展示館を利用して	3
その他	3
計	99

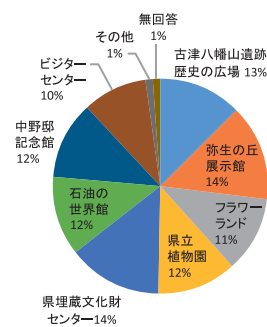
※複数回答あり



8.弥生の丘展示館周辺施設の利用

古津八幡山遺跡	47
歴史の広場	54
弥生の丘展示館	54
フラワーランド	43
県立植物園	45
県埋蔵文化財センター	53
石油の世界館	44
中野邸記念館	44
ビクターセンター	36
その他	4
無回答	4
計	374

※複数回答あり



9.講演会・講演会場など

	大変満足	満足	普通	不満	大変不満	無回答	計
時期	17	30	12	0	1	2	62
場所	27	25	7	1	0	2	62
内容のわかりやすさ	34	22	2	0	0	4	62
施設全般:映像、照明、空調、バリアフリー	23	24	10	1	0	4	62
職員の対応:言葉遣い、マナー対応、説明	29	22	7	0	0	4	62
印刷物:わかりやすさ	33	22	5	0	0	2	62
全体の満足度	31	26	3	0	0	2	62

アンケート結果（講演会2回分のアンケート合計）

アンケート結果一覧（講演会別）

項目		第1回	第2回	計
年齢	20歳未満	0	0	0
	20代	2	0	2
	30代	0	1	1
	40代	1	0	1
	50代	2	9	11
	60代	3	18	21
	70代	5	19	24
	80代以上	0	2	2
	無回答	0	0	0
	計	13	49	62
性別	男	9	34	43
	女	3	15	18
	無回答	1	0	1
	計	13	49	62
職業	小学生	0	0	0
	中学生	0	0	0
	高校生	0	0	0
	大学生	1	0	1
	会社員	1	7	8
	公務員	2	4	6
	自営業	1	3	4
	教職員	0	0	0
	主婦	0	5	5
	無職	5	25	30
	その他	3	5	8
無回答	0	0	0	
計	13	49	62	
住まい	北区	0	1	1
	東区	0	5	5
	中央区	0	3	3
	江南区	2	5	7
	秋葉区	6	18	24
	南区	0	1	1
	西区	2	3	5
	西蒲区	1	3	4
	市外	2	9	11
	県外	0	0	0
	無回答	0	1	1
	計	13	49	62
交通手段 (複数回答あり)	自家用車	12	46	58
	自転車・バイク	0	0	0
	徒歩	0	0	0
	タクシー	0	0	0
	路線バス・区バス	0	3	3
	JR	1	0	1
	その他	0	0	0
	無回答	0	0	0
計	13	49	62	
講演会情報 入手先 (複数回答あり)	ポスター・チラシ	7	22	29
	市報	3	22	25
	その他広報誌	0	2	2
	テレビ・ラジオ	0	0	0
	新聞	0	1	1
	雑誌・情報誌	0	1	1
	インターネット	2	9	11
	市ホームページ	3	2	5
	まいぶんナビ	4	6	10
	人から聞いて	1	8	9
弥生の丘展示館 を利用して	1	2	3	
その他	1	2	3	
計	22	77	99	

項目		第1回	第2回	計	
時期 (無回答あり)	大変満足	4	13	17	
	満足	7	23	30	
	普通	2	10	12	
	不満	0	0	0	
	大変不満	0	1	1	
	無回答	0	2	2	
計	13	49	62		
場所 (無回答あり)	大変満足	6	21	27	
	満足	6	19	25	
	普通	1	6	7	
	不満	0	1	1	
	大変不満	0	0	0	
	無回答	0	2	2	
計	13	49	62		
内容のわかり やすさ (無回答あり)	大変満足	5	29	34	
	満足	7	15	22	
	普通	0	2	2	
	不満	0	0	0	
	大変不満	0	0	0	
	無回答	1	3	4	
計	13	49	62		
施設全体:映 像、照明、空 調、バリアフ リー (無回答あり)	大変満足	4	19	23	
	満足	8	16	24	
	普通	0	10	10	
	不満	0	1	1	
	大変不満	0	0	0	
	無回答	1	3	4	
計	13	49	62		
職員の対応: 言葉遣い、マ ナー対応、説 明 (無回答あり)	大変満足	7	22	29	
	満足	5	17	22	
	普通	0	7	7	
	不満	0	0	0	
	大変不満	0	0	0	
	無回答	1	3	4	
計	13	49	62		
印刷物: わかりやすさ (無回答あり)	大変満足	7	26	33	
	満足	5	17	22	
	普通	0	5	5	
	不満	0	0	0	
	大変不満	0	0	0	
	無回答	1	1	2	
計	13	49	62		
全体の 満足度 (無回答あり)	大変満足	5	26	31	
	満足	7	19	26	
	普通	0	3	3	
	不満	0	0	0	
	大変不満	0	0	0	
	無回答	1	1	2	
計	13	49	62		
次回講演会 に参加 したいか (無回答あり)	ぜひ参加したい	8	29	37	
	出来たら参加したい	3	19	22	
	あまり参加したくない	0	0	0	
	参加しない	0	0	0	
	無回答	2	1	3	
	計	13	49	62	
今後の会場 (無回答あり)	現在の場所でもよい	11	35	46	
	別の場所がよい	1	2	3	
	無回答	1	12	13	
	計	13	49	62	
来館回数	ない	1	2	3	
	1回	1	4	5	
	2~5回	3	17	20	
	6~9回	2	9	11	
	10回以上	6	17	23	
	無回答	0	0	0	
	計	13	49	62	
	開催中の企画 展を見た (無回答あり)	はい	7	26	33
		いいえ	6	18	24
		無回答	0	5	5
計		13	49	62	
開催中の企画 展を見る予定 (無回答あり)	ある	6	18	24	
	ない	0	1	1	
	無回答	0	4	4	
	計	6	23	29	
弥生の丘展示 館周辺施設の 利用 (無回答・ 複数回答 あり)	古津八幡山遺跡	10	37	47	
	歴史の広場				
	弥生の丘展示館	10	44	54	
	新津美術館	-	-	0	
	フラワーランド	9	34	43	
	県立植物園	9	36	45	
	県埋蔵文化財センター	10	43	53	
	石油の世界館	9	35	44	
	中野邸記念館	9	35	44	
	ビジターセンター	8	28	36	
その他	1	3	4		
無回答	2	2	4		
計	77	297	374		

## 講師略歴

坂井 秀弥 (さかい ひでや)

新潟県新潟市沼垂出身

新潟市歴史博物館館長・奈良大学名誉教授

相田 泰臣 (あいだ やすおみ)

新潟県三条市東三条出身

新潟市文化財センター学芸員

令和4年度

史跡古津八幡山 弥生の丘展示館

企画展関連講演会 記録集

編集

新潟市文化財センター

〒950 - 1122 新潟市西区木場 2748 - 1

TEL 025 - 378 - 0480 FAX 025 - 378 - 0484

発行

2023年6月1日